

近

世

編

一 元禄期までの出石の領主

前野長康譜	
前野氏	義道空心大禪定門
小右衛門尉	云但馬守
小二郎子	文錄 <small>(母)</small> 四年拾月拾九日卒
長康	織田信清ニ属ス、信清犬山退去後牢人、永錄九年 九月織田上総殿肝入、木下藤吉郎殿才量ノ墨股築 城參戰、總勢子大將蜂須賀彦右衛門尉即チ小六正 勝也、彦右衛門尉推舉ニ而羽柴秀吉公旗下ニ加 ル、元龜元年八月信長公越前金ヶ崎ヲ責ムル時、 木下藤吉郎殿殿陣ヲ承ル、此時信長殿木下常陸介 生駒雅楽頭加藤遠江守前野将右衛門等四人勇士ヲ 木下藤吉郎手ニ付ケラル、信長公陣中書狀「金ヶ 崎ニ而殿陣殊之外難義ノ事、後日沙汰可有如件」 小右衛門殿、然者所持致し居候、木下藤吉郎幕下 長康室濃州松倉住人坪内氏女也、犬山城主

小六正勝是ニ加ル、同年六月姉川羽柴殿ニ從ヒ参
戰、天正元年八月信長江州淺井郡小谷城主淺井長
政征伐、將右衛門又羽柴殿ニ從ヒ功有り、天正五
年拾月秀吉公、但馬國責入、同六年播州三木城囲
ム、天正八年四月羽柴秀長公手属シ但馬國此隅山
城責メ出石ヲ取ル、即チ此城ヲ守ル、天正九年七
月秀吉公大挙シテ鳥取城囲ム、秀吉公命ニ依リ蜂
須賀家政前野將右衛門夜陰乗シ敵地ニ放火多大功
有、織田信長公本能寺ニ於テ明智殿ニ打ル、即チ
將右衛門但馬出石城ヲ守ル、後出石城ヲ賜ル、四
国征伐九州小田原陣朝鮮役等功多モ、故有而亡命
仕ル、

一 勝長 小兵衛 佐々成正臣

一 長重 (景定)

二 小出家譜

寛政重修諸家譜

吉政
よしまさ

小才次 信濃守 大和守 播磨守 従五位下

母は秀吉の姑

永録八年中村に生る、豊臣太閤につかへ、文録二年
(様)以下同

従五位下信濃守に叙任す、この年播磨國龍野城
をたまひ、二万石を領す、四年龍野をあらため但
馬國出石城にうつり、六万石を賜ふ、慶長五年石

田三成謀叛のときかれが指揮にしたがい丹後国田
辺城を攻、関原の役終るの後弟遠江守秀家、もと

より御麾下に属し、関東に赴きしにより、吉政も
事故なく本領を安堵す、九年遺領を継、岸和田城
に移り三万石を領し、出石城は嫡子吉英にたま
ふ、十八年二月二十九日大坂にをいて卒す、年四
十九、乾堂元公雲龍院と号す、紀伊国高野山の庫
藏院に葬る、室は伊東掃部助治明が女

秀家 孫十郎 遠江守 母は上に同じ、別家とな
り玄蕃重興が時家たゆことは下に見えた

吉英
よしふさ

り、

右京 右京大夫 大和守 従五位下 母は上
におなじ

天正十五年大坂に生る、文錄二年從五位下右京大夫に叙任す、時に七歳慶長九年東照宮の仰によりて父が住せし出石の城を賜ひ六万石を領し、後叔父三尹に一万石を分ち与ふ、十七年大和守にあらたむ、十八年父卒するにより、三月岸和田城に移され、和泉国大鳥・日根、但馬国養父・氣多・美含五郡の内に於て五万石を領し、出石城は弟信濃守吉親に賜ふ、七月朔日台秀忠徳院殿より領地の御朱印を下さる、(中略)元和五年岸和田をあらため旧領に復し、但馬国出石・養父・氣多・美含・朝来五郡の内に於て五万石を領し、出石城に住す、(中略)寛文三年八月十五日封内の銀山を賜ふ、六年

三月九日卒す、年八十、鴻峰不白雪江院と号す、下谷の広徳寺に葬る、室は保科彈正忠正直が女吉親

吉重

万作 伊豆 修理 修理亮 従五位下 母は
正直が女

慶長十二年出石に生る、寛永十八年二月二十五日はじめて大猷院殿にまみえたてまつり、十二月晦日從五位下修理亮に叙任す、寛文六年京極丹後高國が居城を收めらるるにより、五月四日仰をうけて丹後国宮津にいたり、城請取の事を勤む、十四日遺領を継四万五千石を領し、弟宮内英本主殿英信に各二千石、縫殿英勝に千石の地を分ち与ふ、(中略)延宝元年十二月十二日致仕し、二十一日得物として葉茶壺を献ず、二年正月十八日卒す、年六十八、鑑英宗昭真常院と号す、葬地父に同じ、

室は有馬玄蕃頭豊氏が女	正英百助主水母は上におなじ、保科彈正忠	正直が養子
小出隼人輝英が祖初吉久宮内母は上	小出小弥太英郷が祖初英清虎之助主	おなじ、
小出勘四郎英亮が祖百助縫殿実は保	小出勘四郎英亮が祖百助縫殿実は保	おなじ、
科主水正英が長男、母は井上淡路守庸名が女、吉英が養子となり別に家を興す、	科主水正英が長男、母は井上淡路守庸名が女、吉英が養子となり別に家を興す、	
が女	が女	

二日封を襲、このとき新墾の田千五百石を弟左近英祐初豊範万菊内匠伊予守母は上におなじ、有馬中務少輔忠頼が養子	英直小出喜太郎英蘭が祖初吉晟万徳左近	豊祐初豊範万菊内匠伊予守母は上におなじ、有馬中務少輔忠頼が養子
は頼長が女	は頼長が女	は頼長が女
初吉国鶴松右京大和守従五位下母	初吉國鶴松右京大和守従五位下母	初吉國鶴松右京大和守従五位下母
が女	が女	が女
寛永十四年生る、承応元年十一月二十八日はじめて敵有院殿に拝謁す、時に十歳。六歳(家綱)。寛文六年十二月二十八日従五位下大和守に叙任し、元録五年三月十一日遺領を継、(中略)十月十日卒す、年二十六、浮岳紹貞	寛文七年生る、延宝四年九月十二日初て敵有院殿にまみえたてまつる、時に十歳。七年十二月二十八日従五位下大和守に叙任し、元録五年三月十一日遺領を継、(中略)十月十日卒す、年二十六、浮岳紹貞	寛文七年生る、延宝四年九月十二日初て敵有院殿にまみえたてまつる、時に十歳。七年十二月二十八日従五位下大和守に叙任し、元録五年三月十一日遺領を継、(中略)十月十日卒す、年二十六、浮岳紹貞

一 元禄期までの出石の領主

集雲院と号す、麻布の天真寺に葬る、室は安藤対馬守重博が女、繼室は立花飛驒守鑑虎が女

英長よきなが

初吉任よしとう 久次郎 藏人 播磨守 従五位下

実は小出主殿英信が二男 母は某氏

寛文五年生る、はじめ父英信がもとにありしどき

其采地のうち五百石をわかつたまひ、寄合に列し、貞享三年十二月三日はじめて常憲院殿に拝謁(朝吉)す、元禄五年十月英益が終にのぞみて養子となり、十二月十一日其遺領を継、(中略)十八日従五位下播磨守に叙任す、六年四月二十二日初めて城地に行のいとまをたまふ、七年十二月十七日卒す、年三十、休心太嶽仙峰院と号す、三田の隨応寺に葬る、室は半井驥庵成忠が女

英及よしつぐ 久千代 母は成忠が女

元禄七年生る、八年二月十四日遺領を継、二歳に(中略)九年十月二十二日卒す、年三、恵光伝智昌流院と号す、葬地父におなし、嗣なくして家たゆ、

家紋 額に二八文字 一重桜 八重梅鉢

十六葉の菊

三 松平家譜

上田市立博物館蔵

忠周様御代覚書 (抄出)

一忠周公 寛文元辛丑年四月十九日御誕生 御幼名与十郎様

一延宝七乙未年六月朔日嚴有院様江御日見江 御名秉忠易公

一同年十二月廿七日叙従五位下 御官名阿波守様

一天和三癸亥年六月廿九日忠易様御登城、御家督無相違被仰出龜山之御城其儘御預ヶ之旨上意之趣、御老中御別座堀田筑前守様被仰渡候、御名之儀、台徳院様お忠晴様御拝領ニ付伊賀守ニ御改被遊度旨御願被

仰上候処、七月三日御願之通被仰出候、

一同十丁丑年二月十日御老中様御連名之御奉書到来、
十一日御登城被遊候處但馬出石へ御所替被仰出ル、

御拝借金並泉州御知行所其儘御領知被成度方御用番
土屋相模守様へ御願之處、泉州壱万石御知行所被召
上、但馬ニテ御渡被成候、御拝借金五千両相叶候段、
相模守江仙石段右衛門被召呼被仰越候、則為御礼御
勤被遊候、但、廿八日御所替江之御礼被仰上、此日
御拝借金御願、同晦日段右衛門呼來ル、

一四月廿九日出石御城御請取、但、御在番久世出雲守
様家來中相渡ス、上使馬場三郎左衛門殿・井上内記
殿、請取方人數菅谷隼人・正木五郎兵衛・吉田九郎
左衛門・山本宇兵衛・戸倉甚右衛門・石川三右衛門・
土屋又左衛門・大井三郎右衛門・大野木助太夫・中
根与右衛門・石川儀太夫・騎馬十三騎、鉄砲三十挺、
弓十五張、長柄三十本、旗竿五本
一岩築御城六月三日小笠原佐渡守様御渡シ、上使平岡

金左衛門殿・安藤一郎兵衛殿、御代官岡田五右衛門
殿も御越、渡方横田地弥三右衛門千石之格、佐治八
右衛門五百石格

一六月十一日出石へ之御暇、御拝領物如例、時服御羽
織七月廿一日江戸御発駕、八月二日大津御泊、三日
亀山、五日六日菟原川水出御逗留、七日福知山、八
日久畠、九日出石御入部天氣快晴、十五日御家中面
々於二の丸御□、但、九日御着之日谷山ニ而御家中
面々罷出御目見、

一八月廿二日於二の丸町在庄屋共一同ニ御目見、
一九月十五日十六日於二の丸兩日御能被仰付、御家中
見物被仰付、
(元禄十一年)
一此年國繪図諸国へ被仰付出石へも申来、此御用戸祭
十郎左衛門被仰付候、

一五月十五日為參勤出石御発駕、笹山通り御下向、於
京都松平紀伊守様へ御寄、緩々と御対話(六月五日
着府)

一 元禄期までの出石の領主

一 出石御本丸二の丸共石垣等孕候ニ付家中屋敷之内見
斗、御屋形ニ取繕候様被仰出、此御用去年六月冲太
左衛門ニ被仰付、江戸ヲ御帰城御先達而六月廿一日
江戸出立、出石罷越、御普請申付出来ニ付直御屋形
ヘ被為入候、

一 同十二己卯年四月十四日采昌院様江戸麻布御屋敷ヲ
御發駕、五月二日出石御着、

一 同十四辛巳年正月朔日御老中御連名之御奉書到来、
二日御登城之処日光御名代被仰出候、十二日御暇、
十六日御發駕、廿日御代拝、廿二日御帰府、直柳沢
出羽守様・松平右京太夫様、御用番小笠原佐渡守様
江御勤被遊候、廿四日御目見相済、

一 (元禄十五年) 公儀御犬御用ニ而加倉三左衛門・佐治
久助正月廿四日出石ヲ京大坂堺大津辺江被遣、二月
未出石ヘ罷帰ル、

一 同十六癸未年御城ヲ來候御犬御用被仰付、六月八日
佐治久助並山本弥四郎・野原喜右衛門、小役人足輕

三人・御中間三人、武州之内總嶋村江被遣候、十一
月四日罷帰ル、品川ヲ西へ入、江戸ヲ四里、

一 (宝永二年) 九月廿日御老中様御連名之御奉書到来、
翌廿一日御登城之処、松平右京太夫様御同役御側御
用人被仰付、

一 忠徳様御名乗、字忠栄ながと御改被遊候、
一 (宝永三年) 正月廿八日信州上田江御所替、仙石越前
守様と入替被仰出、

一 四月朔日壱万石御加増並御材木五千本、檜木壱万本
御拝領被遊候 (江戸屋敷建築用材として)

一 五月十六日御拝領屋敷へ御徒移、西ノ丸下元御屋敷
間部越前守様御拝領御渡被成候、

一 六月二日上田御城請取、上使高城孫四郎殿・久永内
記殿、請取方横田地外記、久松有馬、渡方荒木頼母、
一六月十五日出石御城渡、上使進喜太郎殿・野山源八
殿、請取方仙石韁負、渡方岡部九郎兵衛、

2 領村支配

四 小出吉政知行狀

金井次郎氏旧蔵文書（東大史料編纂所蔵）

和泉国南郡加毛利郷參千五百七拾石、同五ヶ庄内八百
七拾石、同埴部郷内千五百五拾八石、都合六千石令扶
助訖、全可領知也、

天正十五
九月二十四日

小出小才次どの

五 小出吉政知行狀

金井次郎氏旧蔵文書（東大史料編纂所蔵）

但馬国内前野但馬守分五万三千弔百石之事令扶助畢、
目録別紙有之、全領知也、

文禄四
八月三日

小出大和守との

六 小出吉英所領目録

（慶長十八年）
金井次郎氏旧蔵文書（東大史料編纂所蔵）慶長十八年
小出吉英所領目録

一

但馬國養父郡

高八拾八石九斗八升

大塚村

高三百六拾三石弐斗

養父市場村

高九百八拾七石六斗八升七合

大屋庄

高六百五拾九石八斗七升

浅間村

高百拾四石九斗

岩崎村

高弐百石八斗三升

大江村

高百六拾八石四斗七升

小田村

高四百九拾三石四斗五升

小山村

高百七石弔斗壹升九合

上野村

高四百五石壹斗五升

畠村

高三百三拾四石五升

玉見村

高弐拾五石九斗四升

土田村

高九百八拾石弔升

一 元禄期までの出石の領主

一高式百四拾七石壱斗五升七合	米里村	一高六拾七石戸斗七升壱合	上野入作
一高百七拾戸石九升	広谷村	一高七拾五石七斗四升	網場村
一高式百五拾戸石五斗四升	あけ村	高合九千四拾六石五斗三合	美含郡
一高三百三拾八石五斗四升	十二所村		
一高七拾五石六斗四升	浅野村		
一高三拾八石三斗壱升	稻津村		
一高百拾七石壱斗戸升	大坪村		
一高九拾壱石壱斗三升	伊津村		
一高五拾八石六斗壱升	宇山村		
一高百拾壱石壱升	宮垣村		
一高六拾三石戸斗五升	新津村		
一高式百八石九斗七升	中村		
一高千拾三石六斗七升	夏梅村		
一高六百八石三升	宿南村		
一高式百四拾三石六斗七升	高柳村		
一高千拾八石三斗五升	丹生三ヶ村		
一高式百九拾九石三斗五升	訓谷村		
一高四百七拾石六升	丹生地村		
一高式百四拾七石八斗七升	下岡村		
一高四拾七石九斗七升	木地村		
一高五拾九石九斗七升	本見塚村		
一高八拾壱石四斗三升九合	門前村		

一高百九石八斗五升五合	奥安木村	一高百四拾七石三斗三升	水上村
一高七拾石五斗七升三合	浜安木村	一高六百六拾六石四斗五升	府市場村
一高百六拾八石三斗三合	須井村	一高百三拾石三斗	竹貫村
一高武拾六石六斗	犬生村	一高武百四拾三石七升	松岡村
一高四拾八石壹斗八升九合	相谷村	一高三百八拾六石四斗武升	土居村
一高七百五拾七石九斗壹合	竹野浜村	一高三百九拾三石壹斗八升	野々庄村
一高合四千六百武石武斗五升五合	氣多郡	一高武百七拾五石八斗四升	芝 村
一高百五拾九石七斗九升六合	久斗村	一高四百三拾六石六斗壹升	上石村
一高百三拾四石武斗	道場村	一高武百六拾武石九斗四升	堀 村
一高武百三拾壹石八斗八升	栗栖野村	一高七百八拾六石武斗四升	池上村
一高百七拾七石七斗武升	八代村	一高三百拾六石三斗八升	清冷寺村
一高百三拾壹石六斗八升	山宮村	一高三百武石武斗三升	夏栗村
一高六拾武石五斗六升	江原村	一高四百六拾六石五斗四升	比地淵村
一高三百五十石五斗四升	なしき村	一高武百六拾武石八斗	弥布村
一高四百三拾六石九斗八升	引野村	一高武百六拾四石三斗	日置村
一高百八拾八石五斗七升	山本村	一高六百三石九斗武升	宵田村
		一高六百三石九斗武升	加屋村

一 元禄期までの出石の領主

一高百四拾六石

一高四拾八石七斗弐升弐合

朝来郡 上郷村
八代村

上郷村

一高百六石五斗六升七合

高合八千八百四拾九石五升五合

地蔵堂

玉子村

一高九百五拾八石五斗六升三合

くほた田

王子村

一高八百八拾八石壹斗七升六合

石才境村

高合千九百九拾五石六斗壹升三合

泉州分

高合弐万七千五百四石弐斗六升五合

高都合五万石

慶長拾八年
丑九月三日

安藤対馬守
青山図書助
土井大炊助

小出大和守殿

下田八間

下谷
弐畝四歩

和久三郎右衛門入
弐斗三升五合

九郎兵衛

国分寺村

七 菅谷村檢地帳

(表紙1)

荒木区有文書

寛永拾弐年

但州出石郡菅谷御檢地帳

小林久兵衛

江見覺右衛門

大田三大夫

九月吉日

(表紙2)

元和弐年

但州出石郡菅谷御檢地帳

(以下破損)

小林久兵衛

和久三郎右衛門入

弐斗三升五合

九郎兵衛

下田	卅六間 拾武間	同所 同人	一下田永荒貳拾三町五反八畝廿三分
下田	卅間 拾間	同所 同人	分米二百五十九石四斗六升四合 永荒
下畠	八間 拾八間	同所 同人	一反 ^{二付} 一石一斗代
下田	廿六間 廿二間	同所 同人	一反 ^{二付} 一石一斗代
下田	廿六間 廿二間	同所 同人	一反 ^{二付} 一石一斗代
一上田	拾壹町三反八畝十六分		一屋敷
	分米百四拾八石九合 一分	一反 ^{二付} 壹石一斗代	麻畠九反九畝九分
一中田	拾九町八畝一分		分米拾貳石九斗九合 一分
	分米貳百廿八石九斗六升四合	一反 ^{二付} 壹石一斗代	分米五石七斗九升三合 一分
一下田	貳拾町七畝四分		一反 ^{二付} 壹石一斗代
	分米貳百貳拾石七斗八升五合	一反 ^{二付} 一石一斗代	一中畠
			拾町一反九畝拾分
一下田	當荒貳町一反四畝		
		一反 ^{二付} 一石一斗代	下畠壹町四反九畝九分
			分米貳拾七石九斗四升四合 一分
			一分
			下畠永荒六反六畝廿分
一下田	當荒六町九反四分		
		一反 ^{二付} 八斗代	分米貳拾七石三斗三升三合 一分
			一分
			下畠永荒六町九反四分
一下田	當荒三石五斗四升		
		一反 ^{二付} 一石一斗代	田畠毛付合六百九拾石壹升七合 當荒共二
			右之内貳拾石八斗七升三合當荒

一 元禄期までの出石の領主

大すぎ
上田
きち田
きち田
上田
やき
上田
八畝

壱反壱畝拾分

八畝

壱石四升
壱石四升
壱石四升

五斗武合

畠方壱石七斗五升

与三衛門

(中略)

八 坪井村名寄帳

坪井村	元和八年
三月廿六日	

五左衛門

(中略)

田方七石七斗六升八合

やしき武斗

畠方七斗九升九合

助二郎

元和二年
九月吉日

小林久兵衛
江見覺右衛門
大田三大夫

中山三郎家文書

(中略)

田方七石四升

あれち

やしき三斗五升

畠方壱石九斗七升四合

二郎三郎

田畠永荒合三百拾四石六斗七升五合
惣高合千四石六斗九升武合

いのほた
中田六畝拾四分
(中略)
七斗七升六合

田方拾六石五斗五升武合

やしき三斗六升四合

畠方壱石九斗七升四合

田方拾四石壱斗弐升壱合

やしき弐斗八升壱合

畠方壱石七斗七升

上田弐拾九分

壱斗二升七合

三郎兵衛

畠方壱石三斗壱升六合

(中略)

田方拾八石一斗六升五合

やしき四斗五升五合

畠方四石五斗三升九合

孫右衛門

メ

伊左衛門

田方拾六石三斗六升三合

やしき八斗五升五合

畠方三石弐斗八升九合

太郎兵衛

田方メ百三石七斗壱升七合

やしきあさはたメ三石弐斗六升弐合

畠方メ拾九石九斗弐升八合

惣高合百弐拾六石九斗七合

田畠あれ共

田方拾六石六斗六合
やしき三斗六升七合
畠方四石四斗九升壱合文五郎分
彦太郎

つぱい村

惣百しやう中

(中略)

田方七石五合

やしき三斗九升

九 坪井村検地帳

中山三郎家文書

一 元禄期までの出石の領主

(表紙)

正保式乙酉曆

出石郡坪井村御地改之帳

八月十二日

庄屋敷	四畝	五斗武升	新右衛門
家きわ 麻畠	武拾四步	壠斗四合	同人
西谷 下畠	九歩	武升壠合	甚五郎
同所 下畠	壠畠九歩	九升壠合	孫右衛門
同所 中畠	武拾七步	八升壠合	同人
西谷 中畠	拾八步	五升四合	彦五郎分
(中略)			
大荒	壠町七反八畝廿四歩	拾七石八斗八升	惣分
上々田	五反四畝武拾四步	此分米七石六斗七升武合	
壠石四斗盛			

内

壠石三斗盛	上田	三町七反七畝武拾四歩
壠石武斗盛	中田	壠町六反九畝拾武歩
壠石壠斗盛	下々田	此分米四拾九石壠斗壠升四合
壠石三斗盛	田	八反七畝三歩
壠石盛		此分米九石五斗八升壠合
壠石三斗盛	下々田	三反四畝九歩
壠石盛		此分米三石四斗三升
壠石壠斗盛	田	武畝六歩
壠石三斗盛		此分米武斗武升
壠石壠斗盛	田	壠反武拾壠歩
壠石壠斗盛		此分米壠石三斗九升壠合
壠石壠斗盛	田	四畝拾武歩
壠石壠斗盛		此分米五斗七升武合
壠石壠斗盛	田	四畝三歩
壠石壠斗盛		此分米四斗五升壠合
壠石壠斗盛	田	七反四畝武拾四歩
壠石壠斗盛		此分米七石四斗八升
壠石壠斗盛	田	五反五畝拾八歩
壠石壠斗盛		此分米五石四合
壠石壠斗盛	田	武反五畝武拾七歩
壠石壠斗盛		此分米壠石八斗壠升三合
五斗盛	下々畠	武反五畝武拾壠歩
五斗盛		此分米壠石武斗八升五合
荒畠	壠反三畝武拾七歩	此分米六斗九升五合
大荒	壠町七反八畝武拾四歩	
		此分米拾七石八斗八升

右分米合式拾六石九斗壱升六合

内

九拾弐石八升八合
拾六石三升三合

弐斗弐升

六斗九升五合
拾七石八斗八升

田畠荒共

田方

畠方

荒田

大荒

富田弥左衛門
(花押)大崎勘右衛門
(花押)岡田八郎右衛門
(花押)正保式乙酉曆
八月十二日

○ 旧高・改出村別一覧

『出石江御所替之節書類』
出石神社蔵○ページ数の関係から、内容は表にした。
右之通、出石請取之節、相渡り申候、以上

戊六月十五日

高瀬五左衛門
印

村	高	外		村	高	外	
		改出	新発			改出	新発
佐 田	207.888	73.278	4.008	出 石	郡	石 合	石 合
久 煙 市 場	221.399	87.213	160	日 野	辺	319.238	5.292
後 中	86.645	32.537		上 野	野	269.122	32.870
小 坂	98.619	59.323		桐 野	坂	301.992	32.120
大 河 内	106.856	59.632		寺 坂		347.629	24.378
薬 王 寺	214.731	38.691		水 石		186.460	19.772
赤 花	251.182	101.499		畑 本		352.479	42.221
坂 津	552.980	194.981	825	河 天	谷	213.307	45.184
中 山	103.029	13.071	825	中 出	合 尾	161.522	101.081
口 藤 森	254.817	64.379	2.079	三 出	市 場	128.637	9.279
坂 野	493.283	455.587	1.201	出 合		47.546	6.033
出 石 町 分	80.858	10.258	1.199	合 市		93.427	
水 上	664.225	119.769	6.800	中 佐 々 木			
弘 原 町 分	304.756	25.200		小 谷		200.360	66.261
長 砂	650.770	210.583	4.028	相 正	田 法	252.426	97.216
弘 原 中	61.226	7.767		平 法	寺 田	124.514	33.320
弘 原 下	323.117	54.865	1.248	栗 尾		275.779	35.868
	326.556	42.246				345.312	100.993
							2,100

一 元禄期までの出石の領主

(4)

(3)

村	高	外		村	高	外	
		改出	新發			改出	新發
安木	180,418	71,441	3,124	奥山	65,240		
訓谷	490,345	11,950	5,107	弘原上	445,251		2,758
無南垣	300,470		1,905	加治屋	97,417	15,537	8,458
丹生沖浦	29,880	17,591	275	細見	323,102	41,138	51,549
丹生上ヶ村	69,765	17,781	264	荒木	392,546		63,421
丹生浦上	88,785	54,052	72	福見	100,426	5,774	9,003
丹生地	171,328	30,402	5,703	暮坂	134,167	9,033	25,176
九斗	54,267	869	1,327	福居	444,806	50,126	11,680
米地	27,124	13,729		伊豆	739,219	87,826	10,933
下岡	232,407	6,529	24,161	立石	198,141	90,309	3,879
上岡	229,522	12,739	16,007	三宅	501,736	142,030	4,914
隼人	143,746	10,813	3,348	森尾	299,755	37,608	2,446
烟	146,002		8,194	穴見市場	190,223	3,272	18,581
三川	47,972		10,288	奥野	415,309	49,629	8,938
土生	30,724	38,600	10,519	奥小野	489,025	47,976	17,085
本見塚	63,303	52,074	561	口小野	318,964	26,431	15,577
大森	101,148		10,798	宮内	880,649	105,047	9,470
境	74,323			坪井	113,166	13,750	1,292
一日市	174,861		774	袴狭	690,714	74,286	11,974
一若松	113,050		1,050	田多地	188,875	23,038	6,259
香住	541,226		9,768	鷲嶋	409,518	48,376	9,649
七日市	128,510	5,904	3,076	安良	225,290	27,758	730
矢田	125,415			鉢山	658,314	83,520	202
下浜	301,090	1,072		香住	438,774	55,666	3,993
油良	86,918			片間	366,284	44,897	1,677
須柄	39,221		216	三木	481,006	58,148	3,552
森	291,980	2	5,570	大谷	499,306	58,124	5,224
加鹿野	15,320			丸谷	103,250	13,010	870
小原	296,447	2,683	5,760	中谷	80,221	9,479	1,885
中野	143,638			森居	130,670	15,025	1,524
藤	72,997		11,632	尾崎	168,930	17,857	3,173
八原	212,450	32,688	558	鳥居	247,707	48,539	5,422
久斗山	19,425		11,759	長谷	42,642	63,978	6,151
余部	336,670	115,790	196	小計	19,711,347	3,798,768	44,801
小計	6,363,932	504,138	175,660				(445,635)
養父郡				美含郡			
米地	256,975	105,570	11,343	竹野	759,698		
養父市場	368,473	29,314	64,024	須井	172,702		16,701
門前	81,439	18,362		相谷	50,785	7,429	6,947

2 領村支配

(6)

(5)

村	高	外		村	高	外	
		改出	新発			改出	新発
糸 原	82,320	12,845	7,960	上 小 田	182,340	50,785	4,462
宮 本	98,709	10,327	7,991	下 小 田	118,296	11,225	4,740
門 野	52,670	8,220		藪 崎	239,484	5,492	60,410
須 西	43,938	15,428	4,237	米 里	247,157		806
和 田	60,420	9,423		朝 倉	364,682	50,159	9,930
上 野	44,473	60,458	10,591	国 木	127,960	19,972	
上 ケ	70,419	2,922		小 山	75,525		1,752
広 谷	172,090	33,909	5,334	小 佐	476,904		1,584
小 計	8,047,287	1,814,630	662,030	舞 狂	24,820	10,220	300
			(662,028)	網 場	76,271	36,271	2,924
氣 多 郡				浅 間	610,482		40,908
清 冷 寺	186,240	414,751	4,472	宿 南	466,218	65,327	48,204
伏	286,425	111,850	4,039	伊 佐 新 田	204,988	20,598	19,830
加 陽	603,920	130,667	28,828	青 山	57,385	39,351	619
上 佐 野	301,251	22,030	119,797	三 谷	83,336	80,857	
土 淵	302,230	96,432	128,845	赤 崎	74,638	119,416	5,005
中 郷	373,772	97,699	17,858	浅 倉	132,900	173,526	3,974
芝	40,794	211,741	12,036	高 柳	610,747	1,256	2,821
野 々 庄	394,290	15,712	27,547	坂 本	259,120	40,442	4,396
池 上	227,701		864	小 城	105,410	16,459	10,011
大 岡 寺	5,820	880		浅 野	75,640	54,604	944
堀	405,349		7,819	伊 津	91,130	73,297	1,703
新	242,573	209		左 近 山	55,470	47,402	
松 岡	200,892			玉 見	25,940	53,661	
府 市 場	592,023		33,721	新 津	63,250	109,955	
上 郷	148,722	20,006	13,368	宮 垣	111,010	94,466	
多 田 屋	139,084	18,500	56	上 山	58,610	134,434	221
宵 田	444,300	11,598	42,647	樽 見	132,925	6,987	9,691
国 分 寺	146,	130,813		中 夏 梅	243,628	16,354	29,784
石 立	55,662	8,460	1,185	加 保	255,145		8,370
弥 布	379,129		13,800	大 市 場	204,167	24,020	9,785
久 斗	59,796	7,270	2,828	山 路	114,540		12,391
夏 栗	316,377		344	笠 谷	59,596	4,196	6,054
道 場	134,200		1,329	大 杉	54,995	5,485	5,794
海 老 原	2,725	10,011		蔵 垣	141,835		54,335
名色村の内	297,262	819		筏	169,666	16,157	64,553
栗 栖 野	231,870			中 間	120,632	5,834	60,911
日 置	262,800	58,298	903	若 杉	102,480	45,386	49,482
引 野	438,450	14,063	30,832	横 行	59,275	57,821	7,167
					37,430	11,437	6,687

一 元禄期までの出石の領主

内		外	
村	高	改出	新発
上土	石居 366.578	10,008	1,551
竹	貫原 130.300	43,488	1,943
江	原宮 62.560	7,440	312
山	131.680	145	1,540
小計	8,877.434	1,442.074	1,783.773
合計			(498,464)
合計	43,000,000	7,559,610	1,783.773

右は当御免相御百姓中相対之上を以極之遣候間、御年貢米大豆來ル霜月中ニ急度可有皆濟候、若小百姓等死失候共、相残者として御納所可仕者也、

羽賀座村

四百拾弐石六斗七升八合
候内三拾卷石八斗六合毛付高ニ五歩ノ追免被遣
取三百八拾石八斗七升弐合

米大豆

取四百弐拾四石九斗九升壱合

田畠

延宝八庚申曆出石下郡羽賀庄村當御免相
五ツ五分五リソ五毛四拾三八
五百六十石
五百六十石

袴狹区有文書

二 捩座村免狀

村	高	外	
		改出	新発
上土	石居 366.578	10,008	1,551
竹	貫原 130.300	43,488	1,943
江	原宮 62.560	7,440	312
山	131.680	145	1,540
小計	8,877.434	1,442.074	1,783.773
合計			(498,464)
合計	43,000,000	7,559,610	1,783.773

- 注 1. 近世初期の検地までの高が旧高、検地時に増加された高が改出高、それ以後、宝永3年までの間の開墾地が、新発高である。
2. とくに新発高は、小計の数字と合計数字が合わない。いちじるしいのは気多郡の計と四郡全体の数字と同じ数値になっていて、明らかに誤りである。しかし表は原史料のまま記載した。() に推計を記してみた。

拾八石三斗壱升三合

大豆

此内式石四斗六升式合同断
取九石八斗五升壱合

夫米

三拾壱石八斗七升四合

夫米

此内式石五斗七升右ノ二口ニ懸ル夫米

夫米

同村新開

田方

一高四斗八升

田畠

当御物成皆無
八分武りん一毛九拾一合

田畠

取四斗五升

田畠

内

四升五合

米

此内壱升壱合右同断
三升四合

大豆

四斗五合
此内式斗三合右同断
式斗三合

米大豆

夫米なし

米大豆

申ノ
十月十七日

庄屋へ参

羽賀庄村

秋庭角右衛門(印)

同村新開丸谷分
一高五石八斗八升六合

田畠

取壺石武斗一升九合

米大豆

内

壺石六合

米

此内武斗三升八合ハ毛付高ニ五歩ノ追免被遣御用捨

壺石七厘六分六厘七毫六分六厘七毫七厘
一高四百九拾四石四斗四升
御請仕香住村御免相之事御代官曾根五郎左衛門
田畠

取七斗九升三合

取五拾三石武斗三升五合

米大豆

大豆

内

此内五升三合ハ毛付高ニ五歩ノ追免被遣御用捨

四拾五石九升

米

取壺石三合

八石壺斗四升五合

大豆

夫米なし

外ニ三石五斗九升三合

夫米

右は当御免相御百姓中相対ノ上極之、御年貢米大豆來

ル霜月中ニ急度可有皆済候、若小百姓等死失候共、相
為後日、仍而御請状如件、

万治三年子霜月九日

香庄村

祝蘭三太夫様

庄屋

申ノ

十月十七日

遠山吉左衛門(印)
陰山久太郎

大崎金左衛門様

田井和男家文書

前野三郎左衛門様

一 博奕・諸勝負・富突など申儀、一切仕間鋪候、若密々仕候もの有之候者、当人は不申及、宿ともに可

為曲事

袴狹区有文書

三 元禄九年御法度書（写）

慥シテ 状無之候ハ、指置申間鋪候、惣而不審成者有之ハ可注進事

一 御法度之諸馬並前々よ里留來り候池川ニ而、一切殺

生仕間鋪候、惣而生類憐可申事

一 付り、前々よ里之獵師ハ、其段相断、可得差図事

一 前々よ里留來り候山林竹木之儀者不及申、百姓持山

た里といふとも、無断伐採申間鋪事

一 付り、留山有之所ハ、委細書付可差出事

一 能・操・相撲其外見物之類、留置候儀堅可為停止事

一 結徒党、掠公儀、無筋目儀申立間鋪候、若密々其旨

を催者有之ハ、いつ連によら須可申出、隠置人露顕

は可為曲事

一 付り、惣而無油断遠方罷出間敷候、參候ハ、不

叶儀ニ候者、可得差図事

一 今度在番衆并御役人中家來に対し、廬外仕間敷事
右之条々、町在々共堅可相守者也、

元禄九年子ノ十二月

小野朝之丞

石原新左衛門

壱万六千枚

五分札

壱万八千枚

三分札

貳万枚

壱分札

貳万枚

四 出石銀札通用始末

享保十五戊年十月朔日

一先頃從江戸、爰許札遣之儀付、遂詮議申達候様申

來候付、御役人共打込遂詮議、兼而被仰付置候三

人御役人共承合帳面指出、品々相伺左之通、

一札場唯今迄之町会所店の方當分用ひ間合兼候者、

追而御詮議之上、久左衛門勝手方不殘様借用可

仕事、但、町会所之座敷二間を用可申事

一銀元森庄左衛門仕候事

一銀札高式百貫目

此札拵代入用札(ラマ)本より可仕事

拾匁札

壱万貳千枚

五匁札

壱万四千枚

一札場付人目付役、唯今迄之兩人へ外壱人御加先相

拾匁札

赤色

五匁札

白色

三 分 札

柿色

五 分 札

黄色

三 分 札

浅黃

壱分札

白色

一札場御用向万端宿(ラマ)久右衛門儀茂相勤可申事

一札場諸道具右同断、

庄左衛門存寄次第之事

一札場手代何人(ラマ)而茂庄左衛門存寄次第、尤入用ハ銀元(ラマ)出可申事、但、甚兵衛・平兵衛・加里候儀、

一 元禄期までの出石の領主

済可申哉、札切り申上へニ而、御詮議次第、増人
可被 仰付事

一町在ニ而加判之者、兩人可被 仰付事

一左之兩人ニ加印可被 仰付事

出石町

和泉屋

勘九郎

養父市場村

与右衛門

一養父郡ニ 広谷村

一美含郡ニ 若松村

一氣多郡ニ 江原村

一山之中ニ 久烟村

右之所、大庄屋共御頼之事

↗

一札場ニ而銀引替之事

正銀壱貫目持參仕候得者、札壱貫拾匁引替候事

札壱貫式拾匁持參仕候而、正銀壱貫匁引替候事
右之歩銀、出入差引之、拾匁ハ札場ニ残候事

一札引替刻限之事

朝五時迄八時迄引替仕候事、急用又ハ他所者御當

地ニ而商仕罷帰候節、其外無拠儀者、其趣承届、

何時成共引替候事

一錢遣之事

壱分乃以下錢遣勝手次第ニ仕候、壱分以上銀錢共
堅取遣御停止候事

一札場ニ御足輕・御番人兩人ツ、被 仰付、三ツ道

具鎧申候事

↗

一札遣ニ付銀札引替之事
縱ハ

一通用百貫目トゞ、壱歩通り銀壱ゞ匁札場徳ニ罷

成候事

一一ヶ月五拾匁出入ニゞ、銀五百匁ツ、年中六貫
(貫欠カ)

目ノ積り

メ七貫目程札本徳用

一札通用ニ出居候内、紛失致し居候得者、其分札本之札を可相渡、又札を以銀ニ替候時者老メ武拾之徳用ニ罷成候、

一札場ニ百貫目寄銀有トメ、此内五拾貫目程利なし
ニ御遣用、此利月一步半ニメ、年中九貫目程御徳用ニ罷成候事

一札本入用之事

一八貫匁程

札拵代銀高武百貫目ニメ

札數十萬枚

一壱貫目程

手代四人分抱入用

一五百四拾匁程

札場諸道具入用代

一四百三拾匁程

札場宿代

メ九貫九百七拾匁程、此入用札元ヲ出候事

一札場江被仰付候御条目之儀、承合之上、掛合之御役人差出文言、左之通古条少々直し候而、可然旨詮議之上付札仕、江戸江差上、

定

一当領内札売買之儀、仮令銀壱貫目を以壱貫拾匁

一錢遣之儀六文迄遣、夫々上者、堅札遣相定、若六文之上遣候を聞付見付候者、早速可申出事

一札數六段、但、壱分・三分・五分・壱匁・五匁・拾匁

一銀遣仕間敷旨、五人組連判之書面仕、若相背候者、早速可申出事

一銀遣仕候を乍存知其分ニ仕置、外ガ相聞候者遂

吟味、其身之儀者不及申、組合四人之者越度ニ可申付事

一自此以後、銀遣仕もの於有之者、早速可申出候、吟味之上褒美可遣事

一似セ札仕候者有之ハ、不寄誰可申出候、其上ニ

而褒美可遣事

元禄十年
丑ノ六月十三日

此所似セ札仕もの於有之者、吟味之上重き可付札
行罪科、訴出候者へハ褒美可遣事

3 領民の記録

一 札場ニ而似セ札仕候カ、又ハ銀子取遣之節秤目懸込を仕、其外私欲之効有之候者、不寄誰可申出事

此所札場ニ而似セ札仕候カ、又ハ銀子取遣候付節秤目懸込を仕、其外私欲之効有之候ハ、可處敵科、尤訴出候者有之ハ、褒美可付遣事

一 商買人其外如何様之方ニ而も、他所人宿を構、暫時も罷在候者、大屋・請人等々相断札遣致させ可申、若理不尽之儀有之者、大屋・請人可為越度間、早々奉行へ可申出事

一 於領分他国領之札一切不可取遣、并旅人かけ通之儀者、金銀錢取遣聊構無之事

右之条々可相守之、若違背輩於有之者、可處敵科者也、仍如件、

五 田井家諸色覚日記

田井和男家文書

一 寛文拾参丑ノ歳迄但シ、延宝元年ニ成ル

一 延宝九酉ノ歳迄但シ、天和元年ニ成ル

一 天和四子ノ歳迄但シ、貞享元年ニ成ル

一 貞享五辰年迄但シ、元禄元年ニ成ル

一 元禄拾七申ノ歳迄但シ、宝永元年ニ成ル

一 宝永八卯ノ歳迄但シ、正徳元年ニ成ル

一 正徳六申ノ歳迄但シ、享保元年ニ成ル

一 寛文拾壹亥極月十七日ニ我等香庄村江參ル、

一 亥ノ冬る雪も不降、明ル子ノ正月廿二日迄ハ天氣能草履道ニ而有之處ニ、廿三日ノ朝る雪降出し大雪ニ

罷成、廿四日ニハ往来止り、愛宕參詣も不成、雪ノ
積り降立テ七尺ダ八尺迄、

一子ノ七月五日ニ大雨ニ而、六日ダ洪水、四月閏故歟
中稻まで大形出揃、晚稻ひるぐちくらいニ而候処ニ、

右ノ水ニ而晚稻穗ニ不出大分惡作、其秋免奉行遠山
吉左衛門殿・鷹司新左衛門殿、

一丑ノ春ダ我等身上ニ付、養父と及出入ニ、同八月十

一日ニ実父出石会所へ出ル、其節ハ御家老小出勘左
衛門殿・同兵太夫殿、勘定高畠庄兵衛殿・竹田弥左
衛門殿、御郡代大崎金左衛門殿・松原伝右衛門殿、
御目付安見勘丞殿・杉原次左衛門殿、此衆中列座ニ
而評判之上、禄高六拾石家財諸色共、証文之通、實
父利分ニ被仰付、併養父借銀米ハ我等返弁申答、其
員數之事

一本米六石米や彦右衛門、同三石五斗いなばや新助、
同四石武斗井上弥三右衛門、同六石駄坂村三郎右衛
門、同五石手辺太郎兵衛、子ノ不納米四石三斗、御

種子貸シ武石壺斗、米メ三拾壺石四斗、

一本銀百武拾匁三宅村茂右衛門、同百五拾匁立石村九
郎右衛門、同五拾匁香住村惣右衛門、同百匁天王銀、
本銀メ四百武拾匁、

右銀米共ニ本分ニ而、丑寅兩年ニ返弁申答、外ニ米武
拾石手辺米、此分ハ太郎兵衛と此方相對次第ニ返弁
申答ニ被仰付、右之通八月十三日ニ落着、双方退散
仕ル処ニ、其後養父此方分六拾石之内ニ而、下作米
五石武斗九升引取并かわた新田横枕地崎かわた山境

ニ理不尽申懸ケ候ニ付、又寅ノ四月ニ実父ダ書付指
出、九月十七日ニ会所へ被召出、双方対決迄被仰付、
則引取、下作米御郡代大崎殿ダ御取立被遣候様ニと
の御意、尤新田地崎山境共ニ此方利分、養父義急度
可被仰付候ヘ共、親子相ノ儀故、御宥免被遊候との
御意ニ而、九月十八日ニ相済、其節大庄屋片間村六
郎右衛門・宮内村久兵衛、

一子ノ九月十四日ニ若殿備前守様御前相撲、宮内觀音

堂ノ庭ニ而有ル、大閑豊岡うき舟、相田村たうづき
浮舟勝、関脇八鹿荒岩、豊岡ねぢかね豊岡勝、小む
すび駄坂村権太夫、豊岡はやふね権太夫勝、

一丑ノ五月十三日ニ大雨、明ル十四日ニ洪水、立石村
北浦山之立テ岩隠ル程ノ水也、大分ごミ入ニ成、永
谷香住ノふけ、立石分かわた口のあたり迄稗ヲ蒔、
其秋免奉行前野三郎左衛門殿・板坂新五左衛門殿・
松岡角左衛門殿、其暮米相場六拾壺又迄、

一修理様、延宝式年寅正月十八日ニ御逝去、

一寅ノ八月九日迄明ル十日ノ晚迄大風ニ而、指而雨ハ
不降候ヘとも、洪水ニ成、水岡共夥敷悪作、其秋之
免奉行永谷吉右衛門殿・前田権兵衛殿・板坂新五左
衛門殿、明ル卯ノ春飢震ニ而大分死人有り、丑寅兩
年之不納米、延宝六年ノ歳本米ニ而三ヶ二被召上、
残り米八年符ニ成ル、

一延宝式年ニ札遣始ル、是ハ若狭屋八右衛門と云者、

以前ハ岡田八郎右衛門殿ニ草履取勤罷有、其後魚屋

町ニ而木屋八右衛門と云て有シが、程なく御用間ニ
罷成、屋号も若狭屋と改ル、此者もくろミニテ札遣
ニ成ル、同暮米直段六十七八匁、

一延宝三年卯六月ニ備前様御家督之御入部被遊、同八月
十三日ニ福成寺ニ而御相撲有り、此秋ハ六ツ老歩之
土免ニ而御檢見不請、

一同辰ノ春、豊岡之小頭伝右衛門と云者、火付ノ〔企以
下同〕工ミ致たる、事顯、火あふりニ逢、此時見物ニ參ル、則
豊岡堀川端ニ而、

一同シ歳、安良村七郎兵衛女、夫寝首ヲ切り、奉行所
評判ニ成ル、右ノ女袴座村ノ者なりしが、同村源兵
衛と云者と密通有之、右之仕合、それニ付源兵衛、
女共ニ打首、七郎兵衛ハ底平癪して世間勤ル、
一同シ秋も土免ニ而埒明ク、同夏米直段八拾壺又致し
候處ニ、右若狭屋才覚ニ而、他所米ヲ入レ、七十三
匁ニ成、

一巳ノ歳、内匠殿・兵太夫殿仕置役御免ニ而家老職迄、

替りニ岡田市郎左衛門殿・後藤新兵衛殿・小出安太夫殿・村岡市兵衛殿・山田甚五左衛門殿、此五人衆へ仕置役渡ル、出石郡桜井七兵衛殿・養父遠山吉左衛門殿・氣多片岡源太夫殿・美含永谷善右衛門殿、此四人へ郡奉行被仰付、則右四人衆ニ御目付衆壇人ツ、被相添、出入評判有り、此歳も土免、

一大岡寺八代領との山論、彦坂九平治様御見分ニ而大岡寺利分ニ成ル、此場所之内ニ田有り、新田古田の論仕候得ハ、九平治様被仰候ハ、貳拾年迄内ニハ草ノ根不腐物ニ候間、畦ヲ打返シ候様ニとの御意故、打返シ候ヘハ、草ノ根慥ニ有之、大岡寺申分之通新田ニ極ル由、

一西ノ下報意と石黒九郎左衛門と祢布村分田地之出入、出石ニ而報意非分ニ被仰付候所ニ、江戸へ報意罷下り候との儀ニ而、備前様御帰城之節待受、さめがいニ而御目安差上ヶ申ニ付被召連、報意も出石へ参、早速役人中へ被仰付候而、御吟味有之候処ニ、右出

石ニ而被仰付、落着之趣明白ニ有之、殿様ニも御悦喜、報意儀江戸其外何方へ成共、參候様ニと被仰付、不首尾ニ而退、終ニハ江戸へも不参候よし、

一他国廻り御藏米豊岡御分今津村ニ出石藏有、是迄出候所ニ午ノ夏、豊岡甲斐守様御入部ニ付、役人中右出石へ断有之、右今津藏ヲ午ノ春清冷寺村へ引御普請有、其已後ハ他国廻り清冷寺藏迄出ス、右若狭屋八右衛門京都御借銀ニ付横道、午ノ春打首、跡御闕所、家屋敷被召上、此一儀ニ付誤り有之、杉原次左衛門殿御暇、

一午ノ夏、甲斐守様御入部ニ而、九月九日ニ来迎寺ニ而御相撲有り、其秋免奉行遠山吉左衛門殿・鷹司新左衛門殿・松岡十右衛門殿、

一未ノ三月ニ甲斐守様出石御通り之筈故、出石ヲ御馳走ニ豊岡境迄道御造らせ被成候処ニ、境目ノ橋ニ付豊岡と出入罷成ル、其砌清冷寺村三郎兵衛、御代官村橋弥五兵衛殿と出入ニ付籠舎致シ(定以下同)、大庄屋・小庄

一 元禄期までの出石の領主

屋共ニ被召上、依之、宮内村久兵衛・片間村六郎右衛門此兩人ニ被仰付、河谷村三郎兵衛と立会扱ニ成、此方両大庄屋々河谷ヘノ取やり、夫ハ我等ニ被仰付勤ル、則右曖済口、土橋ハ豊岡領河本村分、堀口ノ石橋ハ出石領八社宮村分、堀ハ双方入会可相勵、下り溝さらヘハ、双方立会普請ニ可致事、此取曖双方大庄屋三人ノ印形ニ而済、証文河本・八社宮両方共ヘ相渡ス、

一同秋悪作、免奉行遠山吉左衛門殿・秋庭角右衛門殿・陰山久太郎殿、

一延宝八年申ノ五月八日ニ嚴有院様御他界、(篇)立林ノ宰相様之御代ニ成ル、

一同夏比々閏八月迄ノ内ニ數度之風雨洪水ニ而悪作、免奉行遠山吉左衛門殿・秋庭角右衛門殿・陰山久太郎殿、

一十月廿三日之夜々雪降出し、霜月上旬ニハ往来止ル程之大雪、明ル二月末迄雪有之、麦悉ク腐ル、同極

月ニ五歩ノ追免被下、在々悦喜、

一酉ノ歳、御巡見様方御廻り被遊候、御名付ケ、

久留嶋佐兵衛様・猪飼五郎太夫様・永田弥左衛門様、御歳比五拾余御歳比三十余御歳比廿余

右は酉ノ七月朔日之夜豊岡、二日ノ夜出石、明ル三日ニ丹波小野原ヘ御越、右朔日ニ竹野谷々豊岡ヘ御越被遊候節、江野村々前歳申ノ冬谷々へすりこみ申たる雪ヲ差上申候ヘハ、六月朔日ニ富士山之雪獻上有ル、夫ニまさり、七月朔日ノ雪見物ハ珍敷儀と被仰、御悦被遊候よし、其節、氣多ハ手辺善左衛門、下郡宮内久兵衛・片間六郎右衛門、此三人ノ大庄屋ハ六月晦日ニ豊岡へ被参、其夜五ツ比ニ被帰ル、庄屋年寄ハ人足支配メ、明ル朔日ノ朝帰ル、

一豊岡ニ而御宿、湊屋吉左衛門・絹屋五兵衛・丹波屋津兵衛、

一出石御宿、はりまや九郎左衛門・龍野屋孫太夫・鍋屋六郎兵衛、

一同シ歳、立石村赤坊主と申者、田立村平右衛門方ヘ

押入、衣類等盜、此儀顯、出石_ニ詮儀之所_ニ盜物之

(義)以下同

よし、

宿、豊岡京口町餅屋長左衛門と申者_ニ而有之由申_ニ付、豊岡_ヘ付届ヶ有テ、右長左衛門出石_ヘ引取せめらる、然共子細決白もせず、長左衛門ハ豊岡_ヘ御返し、赤坊主尤同類共_ニ打首_{ごくもん}ニ懸ル、西坂長

太夫殿義、右長左衛門_ヘすうき有、出石_ニ豊岡_ヘ付届ヶ最中_ニ長左衛門方_ヘ西坂_ヲ通路有之由、相聞へ

誤りニ成、余程ノ内遠慮_ニ而終_ニハ御代官上り、替

りニ松岡角右衛門殿・桜井七兵衛殿も郡奉行上り、替り役羽間瀬兵衛殿、

一 同シ歳、數度之洪水、取わけ七月九日_ヲ十日之水_ニ而大分之悪作、当村田方_ニ現米四拾五石物成被付候_ヘ共、請合不申、訴状指出ス処_ニ了簡有之、田方_ニ

而武拾三石捨ル、屋敷年貢御用捨_ニ而田方武拾武石_ニ麻烟年貢被仰付候て辱明、此時ハ遠山吉左衛門

殿・陰山久太郎殿・佐藤十左衛門殿、

一同シ歳、酒井雅來_(頭)守様御逼塞、終_ニハ被及生害_ニ候

一 寛文年間_ニ町分之検地有之シ時、奉行矢野太郎兵衛殿・大崎金左衛門殿・鷹司新左衛門殿・二宮三郎兵衛殿、御目付_ニ南条十郎右衛門殿御出、折節和泉屋六右衛門見舞被申候得ハ、右之御衆中名字を寄セテ読ト御所望有ル、六右衛門一首

やのにのみやの見わたせは なんじやうも竿あふさきのたかつかさ有り

一 延宝三卯歳、氣多土淵村之小左衛門と云者、似せ銀ヲせし因州鳥取_ニ而顯、付届ヶ有テ、出石より南部吉右衛門殿・明石源太夫殿御出、受取被帰、父子共ニ籠舎、終_ニハ構口_ニおいてはりつけ、其時ノ落首ニ

二世までとつみし中のかねことも なま里こんさに顔にけり

是ハ鍋屋七郎左衛門作のよし

一 延宝五年巳ノ八月ニ八代谷藤井村・谷村・奈佐地村

一 元禄期までの出石の領主

の者共からくみ、大坂タケダ・藤村一学と云太夫ヲ呼下シ
哥舞妓せし、折節不天氣ニ而見物人無之時、落首
藤井村谷のとわたる寄せ太鼓 入ハなさじではじ
を一かく

一 竹田ノなまりや惣領と鍋屋七郎左衛門と初参会ノ時、
七郎左衛門（後ニハ弟順と云）一句

若竹のさをなまりやのよつぎかな

一 西ノ夏、村山庄太夫殿御勘定役上り、替りニ大崎金
左衛門殿、

一 西ノ歳、御巡見様方御廻り被遊候節、仕置役藤本安
兵衛殿・岡田惣兵衛殿・山田六左衛門殿、御家老ハ
内匠殿・兵太夫殿・兵庫殿・清左衛門殿・右山田六
左衛門殿以上五人也、

一 同秋比、年貢五里持と云事被仰出、大庄屋衆算用積
り共被致候へとも其後さたもなし、其比御勘定竹村
源之丞殿・大崎金左衛門殿、同暮米直段七拾匁余、
一 戊ノ春、飢震ニ而死人大分有之、其秋ハ満作ニ而米

一段廿五匁六、七匁迄、
一 村々困窮之由被聞召上ケ、戊春土免式拾年平均ニ成
被下、当村田方五ツ武歩ニ成ル、綿目五ヶ一之御用
捨有ル、

一 其後又明屋敷野畠ヘ入、麻烟三斗ノ盛御用捨ニ而石
盛リニ極、

一 大坂タケダ木屋七兵衛と云太夫下り、戌ノ八月廿九日右
九日村ノ下ニ芝居有、古今ノ上手、

一 戊ノ歳ニ小山田弥市郎と云者、企逆心ヲ顯候故江戸
ヲ欠落仕、国々御改被遊、終ニハ奥州仙台せんだいにて
とらへられ候よし、

一 豊岡分大野村、出石分中野村論所あせび山之儀、一
旦豊岡分利運ニ成ル所ニ、中野村七郎兵衛其儘江戸
ニ相詰罷有、終ニハ公事再乱ニ而戌ノ十月ニ佐橋藏
之助様・一岡利右衛門様御見分之上、中野勝ニ成り、
大野村庄屋・三谷村大庄屋三郎太夫籠舎被仰付、漸
大野村高百石ニ付鳥目式貫文ツヽ之科錢ニ而出籠、

則中野々申立ル椎が淵切りひゆの腰林迄あせび山一

跡不残出石分へ被仰付候由、

一亥ノ歳、藤本安兵衛殿死去、小出三左衛門殿へ仕置役渡ル、

一宮津之大守信濃守様と内藤和泉守様と討死、是ハ当分之挨拶ニ付信濃守様過言有之、其意趣ニ付右之首尾と風聞ス、

一堀田筑前守様と板倉石見守様と御殿中ニ而討死、是ハ筑前様御出頭ニ而奢甚敷、殊邪之御心底共相見申ニ付、忠孝之為石見様御手討ニ被成候由、後々ニ段々様子相知レ申よし、

一子ノ秋、惡作免奉行南部吉右衛門殿・陰山久太郎殿・梶原伊之介殿・猪瀬平右衛門殿、此方々付岡ス有毛之内、立石境ニ而八反も損立、
前後一子ノ春、奥野村と森尾香住山論出来、奥野々書付差出ス、其趣

乍恐奉申上候御事

一香庄村・森尾村両村之者共、近年当村之山へ罷越盜申候ニ付、当村々吟味仕、鉈・鎌ヲも取追散シ申候所、当年ハ香庄村・森尾村両村之者共申合、五十人六拾人ツ、毎日罷越、山ヲ盜申し候故、当村々吟味

ニ參見申候得ハ、結句爰元之者共ヲ大勢ニ而取廻シ、当村之者共ヲ打たおし、此方之もの共道具ヲとられ申候故、近比迷惑ニ奉存候へ共、当村之力ニ難及仕合ニ而無是非申候、此通大勢參山ヲ乍盜狼藉仕候而、当村之者共迷惑仕候間、乍恐御公儀様御了簡奉願上候、以上

天和四年子ノ三月二日

おくの村庄屋

桜井平兵衛様

善右衛門

惣百姓

乍恐返答書之御事

一森尾村・香庄村惣百姓共ニ而御座候、然は奥野山之

儀、森尾・香住両村共古來入込之所ニ而入来り申候所ニ、当年新法ニ奥野村入指留可申工ニ而大勢催シ、山へ上り両村木こり共之鉈・鎌押可申と申ニ付、樵共申候ハ、先年入込故只今迄何ら構も無之入來り候処ニ、各別成ル申分鉈・鎌渡し申義存も寄り不申儀と申候而渡し不申候、其段ヲ両村申合せ狼藉仕候様ニ申て、其上盜入候様ニ申成シ候義、大キ成偽ニ而御座候、右之趣先年入込ニ仕、森尾香住両村共毎年薪木統來リ申候所、紛無御座候、豊岡郡近年御請所ニ罷成候、以後奥野村大分之山買申候ニ付、他領へ之壳山、弥大分ニ可仕為新法ニ差留可申工仕り懸ケ、何共迷惑仕候、乍恐、右之段々被為聞召上ケ、古来之通ニ被仰付被為下候ハ、難有可奉存候、以上

天和四年子三月十六日

森尾村庄屋茂右衛門
香住村庄屋徳右衛門

御奉行様

右之通、双方目安返答書共差出ス処ニ、御代官松岡角右衛門殿、大庄屋片間村六郎右衛門ヘ被仰合、御扱有之候へ共、両方不同心ニ而埒不明、其後終ニ御公儀江御取上ケもなし、

一丑ノ二月廿二日之暮六ツ過之時分ニ、辰巳ノ方る星出ルと見ヘしが、其儘光り物ニ成り戌亥ノ間ノ雲ニ入ルと見ヘし、少シ斗間有之、夥敷はたかミなる、其なりしすまと少し後ニ夜ノ五ツヲ打、右之光り又ハなりにおびヘ、爰かしニ而鴈・鴨・雉子など多ク死ル、古今珍敷光り物と風聞ス、同シ夜、後四院新院上皇崩御、右光り物と刻限相違なし、右崩御故、天ニ不思議出来かと涉达さた有り、又同シ夜午ノ刻ニ、公方様之姫君様紀州様へ御縁邊極り申由、

一同シ歳ニ、南部吉右衛門殿親子三人、津田十左衛門殿・中嶋九兵衛殿・永田加兵衛殿・市川権太夫殿・同左源太殿・山田六左衛門殿・山田安之介殿・永谷藤右衛門殿・高畠無得殿、右之衆中殿様ニ恨ミ有之

由ニ而出石ヲ退去、

一立石九郎右衛門、市場善太夫、三宅平太夫公事、丑ノ春、兩人利分ニ済、我等も米四石之取次有之、此後同シ歲、御所望免と被仰、村々土免五歩ツ、上り当村田方五ツ七分ニ成ル、

前同シ春、御用銀懸り差上ケル処ニ、月毫歩半ノ利足ニ而其暮ニ御返済、

一今村甚五兵衛殿、殿様御印ヲ似セ塙屋久左衛門ニ而銀壹貫目借用、此儀頃、御広間ニ而西坂長太夫殿とら連、終ニハ打首、殿様ニモ御不便がり之由、

一庭野幸左衛門殿江戸ニ而不儀有之、打首、
一丑ノ冬、片間村六兵衛大庄屋御免、荒木村六郎左衛門被仰付、

一若狭屋八右衛門身上相果申、已後本町使者宿札場ニ成り、御公儀札ニ極ル、其役ニ山脇新殿へ被仰付処ニ、腰抜け役被仰付段、残念成りとて生害せらる

一寅ノ七月十八日より同廿七日迄、大岡寺ニ而万灯法事有之処ニ、廿五日ノ昼時分より夥敷風雨ニ而大岡寺ニも難儀、其夜より洪水ニ而惡作、其秋免奉行永谷善左衛門殿・前田源左衛門殿・二ノ宮三郎兵衛殿、当村ニ而毛損百五拾石、有毛ハ土免五ツ七歩、いか様こうしや成檢見と村々取きた、

一卯六月ニ役替有之、竹村源之丞殿・永谷善左衛門殿・秋庭角右衛門殿、此三人衆へ御目付役郡支配御所務方公事沙汰共ニ被仰付、御年貢納方ハ大庄屋支配ニ成り、御代官・御郡代共ニ悉ク上ル、丑ノ暮ニ、片間大庄屋御免ニ而荒木六郎左衛門へ被仰付、右納方之時分、菅谷・小坂・伊豆迄六郎左衛門、穴見・小野・嶋・福井迄六郎右衛門、

一同霜月ニ矢根銀山上り山ニ成、其御改ニ坂井七郎左衛門様御越、其節永谷善左衛門殿矢根ニ而鹿ヲ御ころさせ被成候、殺生御法度之時節故誤リニ成、霜月

末々明ル三月迄閉門、終ニハ役目上ル、替りニ湯浅
郷右衛門殿・源之丞殿、町奉行ニなられ、此替り南
条十右衛門殿、其後辰ノ夏木嶋市太夫・山田吉右衛
門殿被成、以上五人此衆ハ御目付公事沙汰評判迄之
役ニ而御郡支配、御所務方ハ松岡角右衛門殿・安田
四郎右衛門殿、

(續カ)

一辰ノ春、桜井新右衛門殿・前田権右衛門殿打^レ、
一立石村ほうか谷出入、寛文五年ニ諍論有之、一旦致
対決候ヘとも、其砌不落着、尤出入落着迄ハ、永谷
之者共不入之筈ニ、其節之奉行衆^ヲ被仰付置候処ニ、
貞享四卯ノ八月十六日ニ永谷村^ヲ押シ入、喧^嘵噪^ニ成^ニ
り、双方ニ手負有、明ル十七日ニハ永谷^ヲ上鉢山・
倉見両村ヲ加りくミ、ほうか谷^ヘ押シ入、又喧^嘵ニ
成、それらおこり同廿四日ニ永谷・倉見・上鉢山^ヲ
目安上ケル、香住村も立石^ヘ加り喧^嘵仕ルよし申上
候ニ付、香住^ヲ口上書九月四日ニ上ケル、立石^ヲ返
答書ハ九月二日ニ上ル、其節ハ源之丞殿・角右衛門

殿・善右衛門殿支配之砌リ、霜月上旬ニ山絵図之儀
被仰付、同廿五日ニ湯嶋伝兵衛ヲ呼寄せ、相手三ヶ
村此方ハ立石・香住以上五ヶ村^ヲ賄、漸明ル辰ノ二
月中旬ニ出来、同廿七日ニ絵図上ル、其砌リハ郷右
衛門殿・十右衛門殿・角右衛門殿此三人、則三月廿
一日ニ郷右衛門殿宅ニ而双方之口上御聞、対決迄有
り、其後七月廿八日ニ論所見分有、其砌ハ奉行衆か
さミ南条殿・秋庭殿・吉右衛門殿・市太夫殿此四人、
下目付原園右衛門殿、小頭兩人、御足輕六人、御郡
代ノ下役小谷仁左衛門殿、御絵書山村八左衛門殿、
御分知御代官河合弥兵衛殿、右之衆中御出見分有、
郷右衛門殿御用番ニ而御出無之、扱九月六日ニ御会
所ニ而御仕置、桜井与五右衛門殿・大槻安右衛門殿、
御目付五人之内市太夫殿俄ニ江戸ヘ御越、残り四人、
以上六人列座ニ而双方対決迄被聞召上、永谷ノ庄屋
申形不届有之由ニ而閉門被仰付、漸御免ニ而辰ノ十

月ニ落着、其趣ハ

出石郡長谷村・倉見村・上鉢山村と立石村論山
裁許之覧

一 倉見・永谷・上鉢山三ヶ村之者申儀ハ、立石村抱山之内ほうか谷之儀、古来より三ヶ村茂入相申場所ニ而候、然ル處、寛文五巳ノ歳ニ立石村より三ヶ村ヲ指留可申との企新規、永谷村より喜十郎と申者、薪木取参候得ハ、立石村又次郎と申者手ヲ負セ申ニ付、喜十郎ヲ又次郎方へ遣候得共、喜十郎親類共底之程彼は氣遣ニ存引取申候、則其節双方及諍論於奉行所ニ致對決候ヘハ、理非之儀ハ後日ニ可有決断候、其間ハ三ヶ村共入相候様ニとの儀ニ付退出仕、夫より以來、其趣ヲ以入相候處ニ又此度永谷村之者共伐取之薪木ヲ立石村之者新法ニ奪取、其上散々ニ令打擲之由訴之、立石村より答之趣ハほうか谷之儀、古昔より立石村之抱山ニ而香住村ハ入相候得共、其外ニ入相申村ハ無之處ニ、寛文五年ニ永谷村より新法ニ押入候ニ付指留、早速奉行所へ申断候ヘハ、其刻双方及對決候得共、

即席之落着も無之候、然ル上ハ永谷村よりほうか谷へ入候儀、先停止之旨、其節之奉行所より差団有之、其以後永谷村より入相之儀無之處ニ、今般又々押領ニ入來候故、鉈・鎌押取候得ハ、還て立石村之者共蒙底候、剩此節ハ倉見・上鉢山両村も永谷村と一味仕、及訴訟ニ候段、弥以新法之由申之ニ付、論所令見分対決之上申付候趣ハ、永谷・倉見・上鉢山三ヶ村之者申候ハ、寛文年中出入之節、是非決断は雖無之候、ほうか谷へ入候儀ハ、先年之通入相候様ニと奉行所より裁断有之由申候得共、右之中分之通ニ候ヘハ、出入ハ其節三ヶ村之理分ニ可相済之處ニ裁断ハ無之、山ヘハ入候ヘと了簡有之由申候、此段理外之申分ニ候ヘハ、全ク偽りと相聞候、并立石村又次郎儀永谷村喜十郎ニ手ヲ負、又次郎狼藉之様ニ申候、其節又次郎理不尽極たる儀ニ候ハ、論所ニ而致候事ニ候ヘハ、旁以存念可相達處ニ、左様も無之段、山盜人之儀故、其分ニ而相止候と聞候、其上入相之場所ニ

而候ハ、三ヶ村並立石村・香住村都而五ヶ村之者共、日々ニ互ニ出合可申答ニ候得共、其儀無之段、忍々ニ入候故と相見候、加之、寛文五巳之歳、諍論之節茂、此度のことく三ヶ村一致ニ及訴訟ニ候由、雖申之、再三遂吟味之処ニ倉見・上鉢山両村之儀ハ目安ニ判形不仕、永谷村老ケ村致判形候由、三ヶ村之庄屋申之候、一等之訴状ニ而候ハ、一ヶ村迄判形可致道理無之候故、其節ハ一ヶ村之諍論ニ而候処ニ、此度兩村相加リ候段、倉見・上鉢山ハ不及申、永谷共ニ虚言之申分、不届之至リニ候、且又、近在五ヶ村之者共ニ神文之上ニ而論山之次第相尋候処、安良・森尾・三宅三ヶ村之者ハ、古今之様子曾而不存候由申之、口小野・奥小野両村之者口上ニ論山之儀理非ハ不存候得共、永谷・倉見・上鉢山三ヶ村之者共、小野両村之抱山へ盜入候節、追上ケ候得ハ、立石村論山へ参候、其時立石村之者共追散シ候ヘハ、退去仕候段、度々及見候由申之候、然ル上ハ、彼是以永

谷・倉見・上鉢山三ヶ村之申分、非分ニ候間、向後ほうか谷へ入候ハ、可為曲事候、立石村之儀ハ、弥古來之通、可令進退之者也、

右ハ論所見分之上、老中列座ニ而再三遂吟味、於對決ニ表書之絵図ニ加印判、双方之間へ出置候条、此旨相守、永ク不可違失者也、

貞享五年辰十月八日

湯浅郷右衛門
南条十郎右衛門

山田吉右衛門

秋庭角右衛門

(印)

永谷村庄屋

角兵衛

倉見村庄屋

孫左衛門

上鉢山村庄屋

助十郎

立石村庄屋

九郎右衛門

同村

年寄百姓中

右之通ニ被仰付、絵図立石村へ渡ル、其節大庄屋宮内村市郎右衛門・荒木村六郎左衛門、

一貞享五辰ノ春、木食聖人、公方様より御廻シ被為遊候
由ニ而、國々ニ而御馳走食ハ白たいとう、とうふ、
黒豆、御聖人ハ二汁七菜、御家老山口長十郎殿其外
同宿衆ハ二汁五菜之料理之由、因幡より御越、養父大
明神へ御参詣ニ而、二月晦日ノ夜養父ノ市場ニ御一
宿、明ル三月朔日ニ出石へ御越、其夜御滞留、御宿
龍野屋孫太夫、山口長十郎殿、はりま屋九郎左衛門、
二日ニ中山ニ御一宿、三日ニ丹後宮津へ御越、宮津
ニ而似セ事顯、夫乃ハ何国ニ而も馳走無之由、右之
横道御上聞へ達、聖人ハ式捨ケ國御追放、長十郎ハ
被行死罪ニ候よし、

一辰ノ春播州姫路之守護本田中務様御家中ニ而山口儀
右衛門と云者、主人ヲ討欠落致たる故、御上聞へ相
達シ、國々守護／＼より御吟味有之候由ニ而、爰元も
御改有り、右之者行衛終ニしれざるよし、

一巳ノ夏、大庄屋所務相止、郡々ニ御代官極ル、則下
郡半分ハ村野四郎左衛門殿・田中新右衛門殿、行

一巳ノ春、三宅村四郎太夫より奥野村庄屋次郎右衛門方
へ茅之所望ニ、状遣、入相ノ山へ所望ノ状遣候段、
以後三宅村之難ニ可成処ニ、夫ニ不構、状遣候段不
届之由ニ而、村中一等致(就以下同)、四郎太夫親子ヲはつし申
ニ付出入ニ成り、五月廿一日ニ南条殿宅ニ而評判ニ
成、一等仕ル事誤リニ成、庄屋小右衛門、又彦右衛
門ハ頭料之科ニよつて此兩人籠舎、我等徳右衛門前
ニ差出候故、兩人口上も御聞被成候、

一元禄三年六月六日、若殿大和守様御初入、同九月
十三日ニ福成寺ニ而御相撲有り、大関訓谷村之かな
いかり、祢布村松風、訓谷勝、せきわき小田村餅屋、
安良村松風、小田勝、小結出石なげざん、宿南村
壱本松、出石勝、小相撲ノ関網場村小砂、豊岡小桜、
豊岡勝、関脇宵田町米虫、川原町若草、米虫勝、小
結浅間村日暮シ、裏町小桜、裏町勝、外ニ豊岡ノ勘
十郎子藤繩弥市と名乗、小相撲ヲ上手ニ取り、鳥目
五百文押領、尤結ノ面々へハ負勝共ニ鳥目押領、行

事宵田町利兵衛・福井村吉左衛門、此兩人百疋ツヽ、明ル未ノ三月ニ手辺龍野屋太郎兵衛宅へ御成有ル、一同八月六日ノ夜、出石構口ニシテ殺シ之女有、其明ケ方豊岡通ひノ駕屋共見付、早速相断候ヘハ、御役人見分之上此女常々近付ク者之義、御穿鑿有之処ニ、出町之淨念と云道心坊ニ近付ク由、此道心其比如來寺住持忍誉と云、長老京都迄召連被越候者也、右メ殺シしれざるゆヘ、明ル七日迄淨念せめられ、不思議出来ニ付、八木町休西と云者之後家せめられ、それタ忍誉京迄之弟子（忍達）せめニ逢、それ又納所ノ角兵衛と云者せめニ逢、是ハ白定（状）以下同もせず籠ノ内ニ而きる物ノゑりをさき首をメ死ル、右休西後家・忍達兩人之口上ニ而大形相知レ申ニ付、九月六日ノ夜忍誉ヲ御城ノ志ぶ藏へ追込、小頭老人、御足輕四人、役人武人以上七人ツヽ、昼夜番、同十一日ノ夜長老せめられ、早速白定せられ候ハ、彼女角兵衛ニ手伝為致メ殺シたるよし被申候故、又志ぶ藏へ追込置、

十月廿三日ニ忍誉ヲ馬ニ乗セ町中引渡シ、構口ニはりつけ、角兵衛死たる者ヲ打首ニメごくもん、一同十月廿六日ニ立石村九郎右衛門と三宅村彦右衛門出入、郷右衛門殿ニ而御聞被成候、我等も前ニ指出候故罷出ル、其日ハ不相済、追而十右衛門殿宅ニ而双方御吟味之上、やり取なしニ落着申由、其節我等ハ不参候、

一同極月廿四日ノ夜かや吉兵衛子権右衛門と云ものさしころし長持ヲさがしたるよし、明ル二月中旬迄公儀詮儀有之候得共、子細不知レ、其節町組太兵衛と云人少シノ誤リニ而追放、前ニ少悪説有夫故かとさゝやく、

一 出石八右衛門と云者之訴訟ニ而午ノ霜月中旬迄月初比迄勧進相撲有、大関因幡ノ山ノ井棍之助と云シ出石庵兵衛と勝負不首尾、其上雪降積ル故相撲崩レル、極月ニ至雪ヲ凌キ芝居、田舎ニ者稀物と云、

一 未ノ八月ニ京都迄三宝院様城崎へ御湯治、則八月廿

三日ノ夜出石ニ御逗留、御宿ハ御使者宿ヲ造作、掃除有テ是ニ御一宿、古今珍敷儀と諸人拝見ヲ願居ル

処ニ、出石豊岡共御法度ニ而老人も不被出、

一同極月廿二日ノ夜々備前守様御病氣ニ而同廿六日ニ

御逝去、京御^(近)諸司代ヘ御断ハ堀兵庫殿・秋庭角右衛門殿、此御返答御待、明ル正月二日ニ御吊有り、江戸若殿様ヘハ桜井平兵衛殿、

御法名

法雲院殿前備州大守貫翁紹通大居士

一申ノ三月十一日ニ大和守様ヘ御家督被仰付候由、同十九日ニ申来ル、

一備前様御病中ニ無沙汰有之由ニテ羽田元順老申ノ四月三日乃閉門ニ而五月廿一日ニ婿明其儘御暇、則廿一日ノ晩ニ出石ヲ退去、

一大和守様申ノ十月上旬ノ御病氣、同十日ニ御逝去之由江戸ヲ申来、所々肝ヲつぶす、

御法名

下郡立石村仁左衛門と香住村八郎左衛門出入

集雲院殿前和州大守淳嶽紹貞大居士

右大和様ニ御実子無之、御從弟藏人様ヲ御養子ニ被成度旨、御病中ニ被願立、首尾能被仰付、御名も播磨守様ニ改り、極月九日ニ御家督渡り候よし申来、

一申ノ三月十八日乃奈良大仏開眼ニ四月八日迄万僧供養有、堂普請ハ未ノ歳乃取懸り、申ノ歳迄兩年ニ漸柱九本出来ノよし、

一右申ノ歳高野山行人方と学料方^(倍)と出入出来、同七月ニ紀州橋本ニ新規之籠屋并御会所御普請有テ、江戸乃寺社御奉行御老人、御目付御老人御越被遊、御詮議有之、其間紀州様乃口々ニ御番人被付、參詣之往来も相止、出入ハ行人方非分ニ付、僧衆於橋本ニ籠舎、其後八月下旬ニ籠船被仰付、一々西國御大名方ヘ御預ケ被為遊、其後行人方僧衆改り申由、尤參詣ノ往来、古昔之通、

裁許之事

一仁左衛門申候ハ、私儀香住村八郎左衛門と申者之忤
 二而御座候、親存命之内々立石村ニ奉公仕罷有候、
 本名親小身者ニ而御座候得ハ、兄、今ノ八郎左衛門
 役介(厄)ニ成不申様ニト存、親死後ニも奉公相勤、其儘
 立石村ニ住宅仕候、然ル処ニ今ノ八郎左衛門手前七
 年以前卯ノ暮及難儀候故、■沢高三石八斗余之所
 質物ニ取本米武石五斗取次候処ニ、八郎左衛門方々
 元利の算用埒明不申候故、質地相渡シ候様ニと數度
 催促仕候得とも、八郎左衛門承引不致候、縱取次米
 無之とても親持來り之沢地ニ而有之候ヘハ、半分ハ
 私も可取道理之物、殊ニ取次米不埒之上ハ土貢可申
 子細無之処ニ理不尽ノ儀申懸ル由、訴之、八郎左衛
 門答之趣ハ仁左衛門儀自分之劔ニ而立石村ニ居住仕
 候様ニ申懸ケ候、中々左様ニ而ハ無之候、右立石村
 二年来罷有候得ハ、其儘住居致度よし、仁左衛門願
 申候ニ付、相應之住宅私方々仕渡シ、其上親名持來

之内畠方茶園迄相添遣し居住為致候、并七年以前之
 借米ニ付、私理不尽申懸候との儀是以相違ニ而候、
 右卯ノ暮借米之儀ハ明ル辰ノ歳名未ノ歳迄、沢地仁
 左衛門ニ作為致、此四年之作徳ヲ以武石五斗之本利
 相済候由申之ニ付、双方遂吟味申付ル趣ハ、仁左衛
 門申候ハ親抱高之内八郎左衛門方々聊も割打不申候
 様雖申之、再三遂吟味之処ニ新宅ヲ拵、畠方茶園迄
 遣候儀明白ニ相聞候、并取次米之儀元利不埒之由■
 申之候ヘとも、四年之内作致し沢分下作米八郎左衛
 門方へ渡シたる証拠も無之、年貢通ニも入方相見ヘ
 不申上ハ、八郎左衛門申形之通取次米之方へ引取候
 物と相■見ヘ候、然ル上ハ彼是以仁左衛門申形非分
 ニ極リ候、尤兄ヘ対シ理外ノ申懸ケ不届ノ至リニ候、
 向後右之沢地ニ障り申ニおいて可為曲者也、
 右者酉ノ卯月廿八日ニ南条十右衛門殿宅ニ而被仰付、
 其節御奉行郷右衛門殿・角右衛門殿共ニ三人

下郡香住村玄徹後家と同村小右衛門出入

裁許之覚

一 後家申ハ旧臘玄徹病中ニ譲り状相認、当村与三右衛門ヘ渡シ置申候との儀ニ而、玄徹死後ニ与三右衛門相渡候、其紙面ニ隠居分之内上田壱反三歩林山壱ヶ所ハ小右衛門女・同伴小万・薬箱・書物之類ハ同虎松、田方三ヶ所ハ三宅村慈等寺、畠方三ヶ所ハ私伴左衛門、茶園・林壱ヶ所宛・家・諸道具・屋敷・竹木共ニ私ヘ譲り申候との書置ニ而有之故、其趣ニ銘々支配可仕覚悟ニ有之候処ニ、小右衛門差出寺付之田地并私親子ヘ譲り之畠方・茶園・林山・竹木共心儘ニ相捌、其上私儀家ヲ罷出諸道具相渡候様ニと理不尽申懸ケ候故、当所庄屋年寄ヘ相断候ヘとも埒明不申由訴之、小右衛門答之趣ハ、私儀玄徹一子ニ而本宅相続仕罷有候、然者玄徹隠居分之諸色余仁方聊構不申道理無之処ニ、玄徹召仕之下女其身并伴小左衛門共品々譲り受候との儀ニ而、我儘之働仕候、

尤親菩提之儀ハ毎迄も私吊申儀ニ有之候ヘハ、慈等寺ヘ寄進之義、得其意不申由申之ニ付、双方吟味之上申付ル趣ハ小右衛門申候ハ右之後家当分召使之下女之由雖申之、玄徹先妻死後數十年之内相勤、伴小左衛門共諸込罷有候上ハ後妻ニ相極り候、依之玄徹ム相応ニ譲り置申物と相聞候、第一小右衛門儀、一旦大分之田畠家財迄申請罷有候上ハ此度妻子夫々ヘ玄徹譲り置候品々付、小右衛門土貢可申子細無之候、則譲り状遂吟味之処、玄徹手跡ニ紛無之候、庄屋年寄申之、然ル処ニ小右衛門理不尽之申懸ケ不届之至リニ候、向後玄徹譲り状之面妨申ニおるてハ、可為曲事候、

一 慈等寺ヘ付置田地之儀、寺領と申儀ハ天下御通法有之候ヘハ、我かまゝニならざる事也、然ル上ハ香住村并之年貢上納諸役相勤、永久可有所持候、其外玄徹ム申受ル面々共、右紙面之通永ク可令支配者也、

右者双方対決之上譲り状委細遂吟味申付ル之条堅

ク可相守者也、

右之通酉五月十一日ニ秋庭角右衛門殿ニ而被仰付、
其節鄉右衛門殿ハ江戸ヘ御越、十右衛門殿・角右衛
門殿御兩人、
一酉ノ五月廿八日ニ小出三左衛門殿拾五人扶持ニ而、
在宅被仰付、氣多郡宵田村ヘ退去、是ハ仕置役ノ内
誤り多ク有之由ニ而、

一同六月四日ニ播磨守様御初入、湯浅郷右衛門殿御目
付役ニへられ旅家老役ニ而御伴、同九月十一日ニ經
王寺ニ而御相撲有り、大関出石庵兵衛・小田村たぐ
りなわ、庵兵衛勝、関脇祢布村ねじふじ・出石白糸、
ねじふじ勝、小結豊岡ノこすゝめ・浅倉村ノ小桜、
こすゝめ勝、外ニ関山ノ井棍之介、同^(附)わき荒岩市郎
兵衛、前浅黄袖之助と云、勧進相撲之者共ヲ其比御
勝手賄京都久川次郎左衛門と云人雇出ス、則棍之介
ニハ金武歩、市郎兵衛・袖之介ニハ堀歩ツヽ、行司
茶屋ノ伴右衛門・清冷寺庄三郎、右結ノ面々行司兩

人共鳥目拝領、

一 同六月十一日ニ替替ヘ有之、秋庭角右衛門殿・樋口
惣左衛門殿・高畠佐兵衛殿・桂仁右衛門殿、郡奉行
御目付寺社方共、其節乃小物成御代官捌ニ成ル、
前後巳ノ春、西ノ下栗栖野村と須谷領太田村・万場村野
公事指おこり、江戸御さたニ罷成、四歩六歩程ニ被
仰付、六歩程出石勝之由、

同断一未ノ歳、八代さこ山入相ニ付、八代領と出石分土
井・松ノ岡・山本・芝・池ノ上此五ヶ村出入出来、
江戸御さたニ而、六歩程出石勝之由、

一酉ノ三月ニ鈴木彦三郎と云者、江戸ニ而主人ヲ討、
欠落致たるよしニ而、此辺迄御改有り、其儘江戸ニ
罷有、顕出候よし、

一出石加陽屋長太夫代々一向宗福成寺旦那ニ而有之候
處ニ、酉ノ二月ニ法花宗本光寺旦那ニ成ル、依之福
成寺々本光寺・長太夫両所へ断有、其内長太夫伯父
分之加陽屋七太夫と云者、書付指出スニ付、三月下

句ニ公儀御詮議ニ而長太夫誤りニ極り、閉門被仰付置、其後宗鏡寺江甫和尚御出、長太夫一代法花、子孫ハ一向宗福成寺旦那ニ立帰り申答ニ御扱、漸増明、長太夫義、七月十一日ニ閉門御免、其日乃伯父分七太夫閉門、是ハ福成寺ヘ腰押たる沙汰有、夫故かと云、

一越後守御家類中根長左衛門殿と云家老役ノ人、備中

ノ大守水谷左京様へ御預ケ被為置候処ニ、左京様御逝去、御子出羽様へ御家督相渡り申所ニ、出羽守様

御大病ニ付御養子被願上、相叶候内、出羽様御逝去、

剩御養子も引続ニ御逝去ニ而四万九千石之御家相絶、

出羽様御別腹ノ弟御家中へ遣し被置候ヲ新知三千石

ニ而被召出候由、依之長左衛門殿義備中ニ不被置、

出石ヘ御預ケ、則元禄七戌ノ正月四日ニ出石ヲ竹田弥左衛門殿・中野助左衛門被遣、同十六日ニ受取被帰ル、

一久千代様戌ノ霜月ニ御出生之由申来ル処ニ、無程播

磨様御病氣之由、極月十五日ニ申来、堀兵庫殿・樋口与右衛門殿江戸ヘ御越之処ニ十七日ニ御逝去之由

同廿三日ニ申来ル、

右御法名

仙峰院殿前播州大守休心天嶽大居士

一亥ノ二月十四日ニ久千代様へ御家督被仰付候由、廿

日ニ申来、廿一日ニ在々ヘも御触有之、

三兵衛殿、

一同九月五日ニ西村茂左衛門閉門、十一日ニ大小被押、

御足輕四人被付候て丹後境迄被送候、是ハ村々ニ而

余り奢有之候由ニ而、

一同極月十二日ニ、樋口惣左衛門殿・樋口与右衛門

殿・九鬼田徳右衛門御暇、同十九日ニ平瀬兵左衛門殿・田井角左衛門殿・原田六之丞殿・田中新右衛門殿・高科小兵衛御暇、秋庭殿・高畠殿・桂殿役目御免、替りニ遠山吉左衛門殿・永谷善右衛門殿へ被仰

付候所ニ、廿五日ニ頓死、弟宮路作兵衛殿へ被仰付、右遠山殿と御両人御郡ノ支配、

一亥ノ歳度々洪水ニ而悪作、其秋免奉行遠山吉左衛門殿・桜井市郎兵衛殿・前田権兵衛殿・二宮三郎兵衛殿、則新古ノ地續ヲ引、有反ノ立毛ヲ平均、三畝十五歩ノ有毛ヲ取、五ツ七分ノ曲尺相ヲ以物成御積り、

前後一戌秋京都ノ町人久烟村ノ者と及出入、桂仁右衛門殿月番ノ節、出入評判ノ上、京者利分ニ被仰付候ヘハ、

翌日其礼ニ罷出、一首

たのめ只天の氣色ハ曇くもなく月の桂の願の清きに

一亥ノ夏、菅(谷)荒木村・福見村山出入、荒木非分ニ落着、六郎左衛門大庄屋小庄屋迄御召上ヶ閉門、替り大庄屋伊豆村甚左衛門、小庄屋荒木村六右衛門、一樋口与右衛門殿屋敷、本屋々座敷迄ハ御勘定場、奥座敷ノ方ハ公事裁許場ニ成、是ヘハ裏門々出入有ル、但、子ノ正月廿七日ニ極ル、

一当村九郎左衛門と聲太右衛門出入、子ノ七月六日ニ

右之屋敷ニテ御間被成、高拾石本屋家財共弥極之通太右衛門、沢分谷田わせ地ヲ九郎左衛門隠居料ニ被仰付、太右衛門女九郎左衛門ヘ不孝不仕候との申わけも相立、太右衛門利分ニ相済、遠山吉左衛門殿・宮路作兵衛殿、御勘定川上武左衛門殿・川合茂大夫殿、御目付西村安右衛門殿、

一子ノ八月より御家中無役ノ衆、知行高百石五人扶持ニ被仰付、中間勧取ニ而三歩一老年宛五人扶持、其内ハ奉公御免ノ筈、

一同十月ニ伊佐村新田公事、桜井右近利分ニ済、

一同十月廿二日ニ久千代様御逝去之由、同廿七日ニ申来候ヲ惣家中・町・在へは晦日ニ触有り、札両替不埒ニ付、札場並鍋や三郎右衛門霜月朔日ノ五ツ比ニ崩ス、手辺龍野屋与三兵衛ハ同日八ツ時分ニ崩ス、伊佐村新田共ノ家、手辺龍野や出作良町作兵衛、永谷かすミノ沢新田鉄屋十郎兵衛家ハ霜月二日ニ崩ス、同日ニ山之中芦谷村之庄屋三郎右衛門ハ鍋屋へ

押入、弘原中村太郎右衛門へ沢原九郎左衛門へ押シ
入ルヲ先役人衆とらへ籠舎、御代官様へ付渡り、漸
明ル壬二月ニ出籠、

一 御在番ニハ丹波亀山之大守久世出雲守様、

一 御代官大坂内閣より小野朝之丞様・石原新左衛門様、

一 御勘定江戸より岩出瀬兵衛様・能瀬権兵衛様・萩原數
兵衛様、

一 御目付江戸より永田弥左衛門様・西尾藤兵衛様、

右之御衆中様極月五日ニ出石へ御越被遊、六日ノ明
ケ方ニ城御受取、扱先役人衆ハ明ル二月十六日ニ出
石ヲ御退去、

一 伊佐村新田ノ家崩シたる科ニよつて浅間宿南
見両村之庄屋年寄極月廿六日ニ籠舎漸明ル初ノ二月ニ浅間ノ
新右衛門宿南ノ伊右衛門出籠、残テ庄屋手寄ハ閏二
月ニ出籠、

一 鍋屋三郎右衛門・龍野や与三兵衛家崩シ候節より豊岡
ニ隠レ居テ、右江戸御役人衆御越ヲ道中ニ待請、御
勘四郎年寄共大庄屋六地蔵村加左衛門、出石分奥佐

目安差上ヶ、則何れ茂様御道ニテ御伴仕出石へ帰参、
一 松平伊賀守様丑ノ壬二月ニ出石ヲ御拝領ニ而、四月
晦日ニ伊賀様御家老御越、受取渡有、此時御目付ニ
ハ江戸より馬場三郎左衛門様・井上外記様御越、出雲
様より城御請取、伊賀様御家老衆へ御渡被遊候、
一 子ノ歳納り米ハ先御家中衆へ被下、不納之分ハ明ル
丑ノ春迄ニ石別三拾六匁之御直段ニ而銀納也、町在
ハ段々米直上り六拾武匁參匁迄ニ成候得共、村々より
御免相之訴訟申上候処ニ、先役より付ケ渡り之帳面御
破り難被成由ニ而、其代り御救として右下直成ル御
直段、御代官様御手代之内ニ松嶋条右衛門殿・松嶋
專右衛門と云發明人有り、并岩出瀬兵衛様御勘定頭
のよし、

一 寅ノ春より佐野村川公事差おこり、同夏口佐野村より江
戸へ参、八月ニ御裏判出石へ付ル、尤相対絵図被仰
付、八月末より九月中ニ出来ニ而、豊岡分口佐野庄屋
勘四郎年寄共大庄屋六地蔵村加左衛門、出石分奥佐

野庄屋三郎右衛門年寄共大庄屋清冷寺村宇左衛門、右之者共十月ニ江戸ヘ参ル、明ル卯四月ニ御見者として相馬小次郎様・岡田五右衛門様此御兩人御越、場所御見分有、其後双方又江戸ヘ参出入落着、出石方非分、

一同七月■出入出来、双方々書付指出シ候へ共、不埒ニ而終ニハ下■地□分新■此通扱申候済、

一卯ノ九月ニ遊行聖人御越、出石御宿昌念寺、豊岡御宿光妙寺、豊岡ヘ右之御荷物渡シニハ伊豆村九郎右衛門・宮内村市郎左衛門・清冷寺宇左衛門、右三大庄屋豊岡迄被參候、其時我等も参ル、但、人足船共氣多下郡々、

一辰ノ春御領ヘ御巡見様方御越被遊、山之中矢根村々出石通りニ糸井ヘ御越被遊候、此御昼休出石、則御宿ハ鍋屋・龍野屋・八木屋此三軒、氣多下郡之人足ニ而奥山迄奉送リ、尤大庄屋衆も袴羽織ニ而罷出候、我等も人足才料(幸題)メ奥山境迄参ル、一辰ノ夏御家老菅谷隼人殿、在宅被仰付、氣多郡堀村ヘ引越、

一午ノ春当村五兵衛、豊岡紙屋加左衛門と出入有、五兵衛利分、

一午ノ夏以来未ノ歳迄五兵衛・与三右衛門出入ニ取結、不落着ノ内ニ与三右衛門ハ未ノ霜月廿七日ニ死去、二御代官角左衛門殿ニ而一応御聞、其後郡奉行山本市左衛門殿ニ而対決有テ、後ニ五月十八日ニ五兵衛籠舎、色々詫言ニ而六月七日ニ出籠、

一未ノ秋々永荒之場所新発ノ御吟味被仰付候故、村中水呑迄神文ノ上ニ而相改候処ニ、永荒ノ内田方ニ而四石四斗余、畑方ニ而起帰り本斗ヘ入、其節ノ新田高四石三斗三升、新畑高三石三斗七升、此内式斗四升戌ノ暮御年貢上納之筈、

一五郎右衛門・五兵衛兩人分ニ而烟高四畝六歩戌ノ暮

右田方御年貢上納申答ニ而酉ノ春願上ヶ田ニ成ル、

被仰付打首、徳右衛門ハ籠ノ前ニ而打首、

一 戊ノ春御所替ニ而越前守様ニ御代ニ成り、夏中ニ段々御入替り有、

一小出様

御知行高五万石

一米屋彦左衛門

戌ノ暮ニ御払米ヲ肝煎、其節かけや江原屋七兵衛、

内
弐千石
千五百石
千五百石
土田付

内
千石
大藪付

一亥ノ歳ニ彦左衛門かけや被仰付御用ヲも弁ル、其後丑ノ八月ニかけや被召上、替り和泉屋勘九郎・彦左

衛門手鍵閉門ニ而明ル寅ノ春御捨免、

一栗田弥三右衛門殿丑ノ八月ニ繁昌ニ而加増立身ノ処

メ六千石

此分、内取ニ而有之候處、久千代様御不

幸之節ニ御直知ニ相成ル、

千石
矢根御銀山付

但シ、口矢根・奥矢根・唐川・木村・太田

市場・中山以上六ヶ村、

残而四万三千石、是ニ小出大隅様御跡西ノ下八ヶ

村、椒四ヶ村、竹野谷廿七ヶ村、右村高五千

石相添、都合四万八千石伊賀守様御拝知ニ成

一 弥三右衛門殿寅ノ夏いぎ町木ノ下甚五右衛門殿屋敷ヘ被遣込置、明ル卯ノ四月十四日ニ小頭雲右衛門ニ成

ル、是ニ又播州ニ而庵万石相添五万八千石仙
石越前守様、

〔追筆〕
此冊子は足立惣左衛門法謐端山是休居士の筆録なり、如何なる故にや、養父郡上箇村片岡某の家に持来る、某も亦其来由を知らず、天保丙申(七年)の秋、藩中井上君借覽し、余ニ見せらる、一見して其手筆なる事を知る、記する所、一々徴とするに足るものあり、然とも他の家ニ在ては、一箇の故紙に同し、又余か家ニ在ては、実ニ家の記録たり、故ニ今一本を写し片岡某ニ贈り、此原本を請求て、余か家に藏し、永く子孫ニ貽すと云、

時嘉永元年戊申冬十二月

玄無外孫滿八十叟

田井惣助謹誌

」

一此節久千代様御病氣疱瘡之由噂有之候、御役人中追々江戸下り登り一切ニハ早御逝去ニ而小出家潰候杯と専惡節有之候、此節出石ニ怪異之事共有之候所ニ、終ニ十月二十二日御歳四歳ニ而御早世被成候、昌流院殿恵光智伝大童子奉申、元禄九年十一月廿二日久千代様御死去被遊候ニ付、御家老御用人者中追々下り登り櫛之歎引如ク騷敷有之、

同廿九日御藏ニ封印申候、我等手作之飯米武石余・餅米少々御藏ニ入置候故出し度、庄五郎ヲ頼、六右衛門出石帰りかけ土橋之所ニ出向セ断申さセ候所、大声ニ而中々ノ事一俵も出候事不成と申候、(中略)其内足輕衆御出、封付候故、春迄大キニ難儀、

此時權之助未御分地無之、久千代御早逝被成候得ハ、御自身ニ御家督渡ルト御心得、御達被成候所、御老中様大名之子ハむさと死る物ニハ無之、此薬用候ハ、一旦ハ蘇候と被仰候由、然共右之御心入故、気も付不申哉、最早堺明不申と之御答、一家中權之助様

家督ニ願候得共、甥之跡叔父之相続例無之、終ニ御
家潰申候、御家潰ニ付、家中之騒動不成大形候、難
懸言語ニ候、銀札所持之者大小分ニかきらす、札場
会所ニ入込銀子札ニ引替不申故、狼藉無言斗、諸道
具手ニ懸り次第、我も我もと奪取立除候由、偏ニ六
波羅如シ、家中之面々、毎日／＼所々方々江立除候
有様、目も不被当、笑止千万成事共ニ有之候、

元禄九子十二月十四日

長良長太夫
橋本小兵衛
鍋屋六郎兵衛
吹田屋嘉兵衛

池田吉太夫

堺屋六左衛門

米屋又三郎

松原半右衛門

大和屋太郎三郎

石原新左衛門様御手代

大森佐左衛門殿

小野朝之丞様御手代

松島半右衛門殿

七 小出家断絶時町中警戒請書

田井和男家文書

覚

一小出久千代様家中御城外明屋敷百弐拾七軒、各様私

共立会御改被仰付、建具・畳等御帳面ニ引合、相違

無御座候、尤番等之儀、町中として被仰付、奉得其

意候、無油断、相勤させ可申候、尤火之元大切ニ可

仕候、不依何事、相替儀候ハ、早々可申上候、万一

龜末仕不念儀御座候は、私共越度可被仰付候、為後

日如件、

八 小出家断絶時減免願

乍恐書付ヲ以言上仕候、

多田勝家文書

一出石下郡村々百姓共ニ而御座候、然者、百姓困窮仕
候段、年々御免相立毛不相應之御高免之次第、其外
小物成等之訛果始り之百姓ニ而御座候故、乍恐書付

相認、去冬大庄屋ヲ以指上ヶ申候處ニ被為仰出候ハ、立毛御檢分も不被為成御義(儀以下同)、殊ニ先御役人立毛檢分之上、被出置候御免狀之義、強ク御訴訟申上候ハヽ、曲事ニ可被為仰付との義、御意被為遊候段、乍恐至極仕候奉存候、然ル上統而御訴訟申上候儀、百姓式として御公儀様ヲ奉掠候様ニ可被為思召上候得共、百姓連々つぶれ切申候体、何之代ニ可奉達御上間様無御座候間、御慈悲と被為思召下、百姓困窮之次第、乍恐被為聞召上被下候様ニ奉願上候、

一十六年以前、都而御拝知御高免ニ付、御訴訟申上候へば、御定免ニ被成御請仕候、然ル処ニ夫々以來段々御免相御上ヶ被成候内、御代々御勝手御不如意又ハ御物入ニ付、一作切立毛善惡ニ無御構、御合力免と被仰、五歩七歩つゝ御上ヶ被成候得共、終ニ其免相御下ヶも不被成、迷惑ニ奉存候、殊ニ去々年、惡作ニ付、去夏百姓きゝんニおよび、田地漸々ニ作立候へ共、御免定御用捨とて不被成、結句御高免ニ被仰

付、去年迄凡毫寸五六步之上り御座候故、年々御未進大分出来仕候ニ付、毎年當下郡々奉公人百人余宛御抱被成、此給米ニ而大分御年貢ニ立用被下、又ハ延米ニ被成御取被成候故、或ハ方々ヘ田地志ち物ニ書入借り米いたし、或ハ人之いとなミヲ以納入、相残リハ翌年之早稻米ニテ、漸々御上納仕來り候、只今年内安キ心も無御座候而迷惑仕候、

一右之通ニ御座候ニ付、村々連々困窮仕、廿年以來ニ出石下郡村々ニ而大小之百姓大分田畠ニはなれ、水役ニ罷成、相殘百姓も右之通故、田地諸方ニ志ち物ニ入候処ニ、当年切取ぎり可申旨借之方々さいそく仕、迷惑ニ奉存候、

一去子歳御免定之儀、御檢分前後數度之洪水立毛水押ニ罷成、悉クはヘ稻ニ罷成、取実無御座、きゝんかれこれニ付、迷惑仕候處、例年之増御高免ニ被仰付ニ付、百姓得心不仕、御免状御出し候へ共、其まゝ先御奉行衆へ返上申、及御訴訟罷有候内ニ、御城

主様御逝去ニ付、其儘打過申候、御代かわり不申候

とても右之御免定御請仕覚悟ニ而ハ無御座候、

茶桑御年貢之儀、先年々數度及御訴訟ニ申候処、茶下地御年貢少々ハ御用捨被成候へ共、大分之御年貢故何とも迷惑仕候、茶下桑下地之分ハ曾而作り毛無御座候処ニ、細々ニ御取り被付、旁以迷惑仕候、此段御赦免奉願候、

以上
右之通御免相ハ高ク諸色田畠之上ニ無御座物迄御取被成候故、百姓共ひしとつぶれ切り、迷惑ニ奉存候当御年貢御取切り被遊候ヘハ、弥田地ニはな連、村々亡所同然ニ罷成候間、乍恐、此度御慈悲奉願上候、奉願候、

一夫米之儀、成高百石ニ付七石五斗宛上納仕候、毎年

所々之御国役普請とて、夫役過分ニ出し申ス上ニ、
大分ニ夫米重々指上ケ申儀、迷惑ニ奉存候、此段御了簡、被為成御用捨奉願候、山手かこ役自今御赦免奉願候、山畠御年貢之儀も、御赦免奉願候、

如此、御訴訟奉申上候村々ニ札銀凡拾貫目余滯申候、

前々通、札取遣御座候ヘハ、御年貢三百石代ほど有之候処ニ、過分之儀ニ而、當上納方之不足ニ罷成、迷惑仕候、百姓屋敷並麻畠義も、只今迄ハすくミニ

御年貢被仰付、迷惑仕候、畠成ニ被為成被下候様ニ

五 定免願（養父郡高柳村）

八鹿町中央公民館蔵

乍恐奉願上ケ土免御訴訟之事

一高柳村之儀ハ、此比五七年も毛免相ニ而御座候処ニ、年々かね相もあがり候而、ひしとつぶれ切り、迷惑仕候、尤谷田杯ニハ、年々毛損も被遣候へとも、かね相不定候而ハ、志ち物ニ取ても無御座候、殊去暮杯者、大分御未進出来仕候へとも、御代官様きひしく被仰候而、不残先々へ御渡シ被成候処ニ、于今得済し不申、日々ざいそく致迷惑仕、かねあい御定被遣候ヘハ、田畠しち物ニ入申し、又ハ一毛ニ売候て

成共、塙明見申度候、

一村之下のそ□たいと申ハ、大高六百石之内三ヶ二御
座候、此分ニハ麦少もまかれ不申、かなけ田ニ而、
年々不作ニ御座候、其段ハ御免奉行様かたも御存知
被遊候、

一畠方之儀、半分余も山畑ニ而御座候処ニ、只今者古
畑ニ罷成、是又年々不作ニ而御座候、殊ニ(猶)しきる
あれ申ニ付、三ヶ一もとられ申、めいわく仕候、
右、田方畑方共ニかね相、余程御さけ被遊□□三□年
も土免ニ御定被成下候へハ、難有可奉存候、

御奉行所様

元禄六年三月六日

惣百姓共

○土免とは定免のことのようである。

二 仙 石 氏 の 藩 政

1 仙石氏家譜・知行

○ 仙石家譜抄録

政明公譜

第四世の祖、諱ハ政明、はしめ政俊と称す、兵部少輔忠俊の男ニして、第三世政俊の嫡孫承祖たり、母は松平紀伊守光晟の女、万治二年己亥三月朔日西の久保邸舎ニ生る、幼名主税助と称す、従五位下越前守に叙任

す、室は中川佐渡守久恒の女津間子、寛文七年丁未二月晦日父兵部少輔忠俊逝去、政明時に九歳、寛文九年己酉二月二十五日祖父政俊老を告て致仕、嫡孫を以て祖の跡を承て、上田城邑六万八十八石余の内二千石を従祖父治左衛門政勝に分ち知らしめ、五万八千八十八石余を襲つて、柳の間に班すべき旨命ぜらる、時に十一年、延宝四年四月十五日中川久恒の女を娶る、天和元年駿河国田中の城主酒井日向守忠能罪有て領知没収せられ、十二月十四日田中城受取の事を命ぜらる、貞享元年正月二十二日、越後国高田城在番を命ぜらる、